

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
67	高坏		10.4		完		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土下層
68	高坏		8.0		3/4		磨耗、詳細不明	坏部：ヘラミガキ・赤彩 胴部：磨耗不明	覆土上層
69	高坏				2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
13号住居址									
70	壺	23.9	-	-	2/3		口縁：縦ハケ→ヘラミガキ？ 頸部：笠描直線文6 胴部：磨耗、詳細不明	磨耗・剥落、詳細不明	床直上
71	壺	18.5	-	-	2/3		口唇：ヘラミガキ・赤彩、口縁：縦ヘラミガキ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下）→波状文	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：ハケ→ナデ	床直上
72	壺	19.1	-	-	2/3		口縁：波状文1、ハケ→ヘラミガキ？頸部：右回り等間隔止め簾状文2（上→下）→帯描斜走短脚	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：ナデ	床直上
73	壺	14.4	-	-	1/3		口縁：強横ナデ、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土上層
74	壺	17.6	-	-	1/4		口縁：ナデ→ヘラミガキ？	横ヘラミガキ？（磨耗不明）	覆土上層
75	壺	-	-	-	2/3		頸部：波状文3帯→笠描沈線区画	磨耗詳細不明	トレンチ、覆土
76	壺	-	-	-	1/2		頸部：笠切T字文（直線文2）→笠描短歯文→冂形浮文	横ヘラミガキ	覆土下層
77	壺	-	-	-	1/6		頸部：波状文→笠描沈線区画 胴部：ハケ→ナデ	ナデ	覆土下層
78	壺？	18.1	-	-	1/8		ハケ→ヘラミガキorナデ	横ナデor横ヘラミガキ	床直上
79	壺	-	9.4	-	3/4		胴部：ハケ→縦ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ナデ	ハケ、剥落詳細不明	P9埋設土器
80	甕	18.0	-	-	1/8		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	強横ナデ	覆土下層
81	甕	18.2	-	-	1/8		口縁：強横ナデ 頸部：帯簾状文or直線文	強横ナデ	トレンチ
82	甕	22.8	-	-	1/10		口唇：縄文（LR）、口縁：強横ナデ	強横ナデ	覆土下層
83	壺	9.2	-	-	1/10		ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	覆土下層
84	甕	19.2	-	-	3/4		口縁：強横ナデ、頸→胴上部：帯波状文6帯（上→下） 胴下部：ハケ→ヘラミガキ？	口縁：強横ナデ、胴上部：ハケ→ナデ、胴下部：ヘラミガキ	P9埋設土器
85	鉢	26.0	-	-	1/10		口縁：横ナデ、体部：ハケ→横ナデ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	トレンチ、覆土
86	高坏	20.4	-	-	1/10		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土上層
87	高坏	15.9	-	-	1/6		口唇：2個一対の山形突起 体部：ハケ→ナデ（ヘラミガキ・赤彩なし）	横ヘラミガキ・赤彩	床直上
88	高坏	-	-	-	2/3		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	覆土上層
14号住居址									
89	壺	-	-	-	1/4		笠描横羽状文→笠描短歯文 胴部：ナデorミガキ	ハケ→ナデ	覆土
90	壺	-	-	-	1/3		ハケ→ナデ	ナデ	覆土
91	壺	-	-	-	1/3		ハケ	ハケ	覆土
92	甕	11.2	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、胴部：ナデ	口縁：強横ナデ、胴部：ヘラケズリ	覆土
93	甕	-	6.8	-	2/3		ハケ→ナデ、底部周辺：ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ナデ	覆土
15号住居址									
91	壺	16.4	-	-	1/2		波状文1、磨耗詳細不明	横ヘラミガキ	覆土
95	壺	19.5	-	-	1/10		口唇：ヘラミガキ・赤彩 口縁：強横ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
96	壺？	20.4	-	-	1/10		ハケ→強横ナデ	横ナデ	覆土
97	甕	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め簾状文1→波状文2、胴部：ナデ	磨耗、詳細不明	覆土

表4 出土土器調査表③

表5 出土器類表④

No	器種	法量 (cm)			遺存 程度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
98	甕	—	6.6	—	1/6		櫛羽状文? ハケーナデ	磨耗、詳細不明	覆土
99	甕	—	—	—	1/10		頸部: 右回り等間隔止め櫛状文1→波状文2、胴部: 櫛羽状文	磨耗、詳細不明	覆土
100	甕	—	7.8	—	1/3		櫛科交字文 ハケーナデ 底部: ヘラケズリーナデ	ハケーナデ (ヘラミガキなし)	覆土
101	甕	—	7.7	—	2/3		ハケーナデ?	磨耗、詳細不明	覆土
102	高坏	—	11.2	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	磨耗、詳細不明	覆土
103	高坏	20.5	—	—	1/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
104	高坏	—	6.6	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	坏部: ヘラミガキ・赤彩、胴部: ナデ	覆土
16号住居址									
105	壺	20.4	—	—	4/5		口縁: ナデ→ヘラミガキ、頸部: 鑿切T字文 (直線文2上→下) 胴部: ハケ→ヘラミガキ	口縁: ヘラミガキ? (磨耗) 頸部: ナデ	R 2
106	壺	19.8	—	—	1/8		口唇: 段縁文 口縁: ハケ→横ナデ	横ナデ	覆土
107	壺	15.9	—	—	完		口縁: 強横ナデ、ハケ→ヘラミガキ? 頸部: 鑿切T字文 (直線文2上→下) 胴部: ハケ→横ヘラミガキ	口縁: 横ヘラミガキ? 胴部: ハケ→ヘラケズリ	R 4
108	壺	—	—	—	3/4		口縁: ハケ→ヘラミガキ、頸部: 鑿描枕線6本、胴部: ハケ→ナデ	剥落、磨耗、詳細不明	R 7
109	壺	—	—	—	1/3		口縁: 縦ハケ→ヘラミガキ、頸部: 右回り等間隔止め櫛状文	ハケ→横ヘラミガキ	床直上
110	壺	—	—	—	1/3		頸部: 鑿直線文?→波状文2 (上→下)	剥落詳細不明	覆土
111	壺	—	11.0	—	完		ハケ→ナデ (ヘラミガキなし)	剥落詳細不明	R 1
112	壺	—	—	—	1/3		ハケ	剥落詳細不明	覆土
113	坏	8.3	4.0	5.2	完		ナデ、底部: ナデ	ハケ→ナデ	R 6
114	壺	11.3	5.5	15.1	完		ヘラミガキ・赤彩	口縁: ヘラミガキ・赤彩、胴部: ハケ→ナデ	R 3
115	鉢	—	7.2	—	2/3		ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	床直上
116	高坏	—	—	—	1/4		ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
117	高坏	—	9.6	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
118	高坏	—	8.8	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	覆土
119	高坏	22.0	—	—	1/10		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
120	高坏	—	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	R 5
17号住居址									
121	壺	18.9	—	—	1/4		口縁: 強横ナデ→ハケ→ナデ、頸部: 右回り2連止め櫛状文	口縁: ヘラミガキ・赤彩、頸部: ナデ	覆土
122	壺	20.0	—	—	1/4		口唇: 山形突起6、口縁: 強横ナデ、ハケ→ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
123	壺	19.0	—	—	1/4		口唇: 赤彩、口縁: ハケ→ナデ、頸部: 交互刺突文→波状文2	口縁: ハケ→ナデ・赤彩、頸部: ヘラナデ→ナデ	覆土
124	壺	14.2	—	—	完		口縁: ハケ→横ナデ、頸部: 右回り等間隔止め櫛状文	口縁: 横ナデ、頸部: ナデ	覆土
125	壺	20.0	—	—	1/4		口縁: 強横ナデ、ハケ→ナデ	横ナデ	柱穴内
126	壺	14.0	—	—	2/3		口縁: 段縁文、ハケ→ナデ 頸部: 鑿描横羽状文	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
127	壺	14.8	—	—	1/4		磨耗、詳細不明	横ヘラミガキ	覆土上層
128	壺	13.6	—	—	1/6		口縁: 強横ナデ、ハケ→ナデ	横ヘラミガキ	覆土
129	壺	—	—	—	1/3		頸部: 右回り等間隔止め櫛状文2 (上→下)	ハケ→ナデ	覆土

表6 出土土器観察表⑧

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
130	壺	-	-	-	1/3		口縁：ハケーナデ、頸部：篋縹羽状文	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	覆土
131	壺	-	-	-	1/6		頸部：篋切T字文→波状文2	ナデ	覆土上層
132	壺	-	10.5	-	1/3		ハケ、底部：ヘラケズリ	横ハケ	覆土
133	壺	-	8.7	-	1/2		ハケ→ヘラミガキ、底部周辺：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ	覆土
134	鉢	-	5.2	-	1/3		ハケ→ナデ、底部周辺：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	覆土
135	壺	-	10.4	-	2/3		ハケ→縦ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ	覆土
136	甕	-	6.6	-	1/3		縹縹羽状文、磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	覆土
137	甕	18.4	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	口縁：強横ナデ、頸部：ハケ→ナデ	覆土
138	甕	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め縹状文 胴部：波状文2	ハケ→ナデ?	覆土
139	高坏	16.1	-	-	1/6		口縁：横ナデ、坏部：ハケ→ナデ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	覆土
140	鉢	22.9	-	-	1/4		口縁：横ナデ、坏部：ハケ→ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
141	鉢	-	6.0	-	1/4		ハケ→ナデ、底部周辺：ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ→ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
142	鉢	20.0	5.6	9.8	1/3		ヘラミガキ・赤彩、底部周辺：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	覆土
143	鉢	13.8	-	-	1/4		ハケ→ナデ	ハケ→縦なヘラミガキ	覆土
18号住居址									
144	壺	-	-	-	1/3		口縁：ハケ→ナデ 頸部：波状文1 口縁：ヘラミガキ・赤彩	頸部：ハケ	覆土
19号住居址									
145	甕	20.2	-	-	1/2		口唇：縹縹状文 口縁：強横ナデ、頸部：右回り2連止め縹状文2→波状文 胴部：縹縹羽状文	口縁：強横ナデ、胴上部：ハケ→ナデ、胴下部→ハケ→ヘラミガキ	覆土
146	甕	7.7	-	-	1/4		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	ハケ→ナデ	覆土
147	甕	15.2	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文→波状文	口縁：強横ナデ、胴部：ナデ	覆土
148	甕	-	-	-	1/4		頸部：右回り2連止め縹状文(上→下)→波状文、胴部：縹縹羽状文	ハケ→ナデ	覆土上層
149	甕	-	-	-	1/8		頸部：左廻り等間隔止め縹状文2(上→下)、胴部：ナデ?	ナデ?	覆土
150	甕	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め縹状文2(上→下)→波状文、胴部：ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	覆土
151	壺	9.2	-	-	1/3		片口、口縁：横ナデ、頸部：ナデorヘラミガキ	詳細不明	トレンチ、覆土
152	壺	9.5	-	-	1/3		横ナデ	横ナデ	覆土
153	壺	12.4	-	-	1/4		口縁：横ナデ、頸部：縹縹状文	横ナデ	覆土
154	壺	20.3	-	-	1/6		口唇：赤彩、口縁：強横ナデ、頸部：縦ハケ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	トレンチ、覆土
155	壺	14.6	-	-	1/4		ハケ→横ナデ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	トレンチ、覆土
156	壺	17.8	-	-	1/10		口唇：面とり、横ナデ 口縁：磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	覆土
157	壺	19.0	-	-	1/10		強横ナデ、ハケ	ナデ→軽いヘラミガキ	覆土
158	壺	22.7	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：ハケ・ナデ	口縁：強横ナデ、ハケ→ナデ	覆土
159	壺	17.2	-	-	1/8		口縁：強横ナデ、磨耗詳細不明	口縁：強横ナデ、磨耗詳細不明	覆土上層
160	壺	17.4	9.4	36.6	完		口縁：強横ナデ、ハケ 頸部：縹縹羽状文2(上→下) 胴部：ハケ→ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ナデ	口縁：強横ナデ、頸部：ハケ→ナデ、胴部：ハケ→ナデ	床直上
161	壺	-	-	-	1/6		口縁：ハケ→横ナデ 頸部：直線文→波状文→直線文	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	覆土上層

表7 出土土器調査表⑧

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
162	壺	-	-	-	2/3		口縁：ハケ→ナデ 頸部：右回り等間隔止め縷状文2（上→下）→波状文	口縁：横ヘラミガキ・赤彩、頸部：ハケ→ナデ	床直上
163	壺	-	-	-	1/3		口縁：ヘラナデ 頸部：右回り等間隔止め縷状文→波状文	ヘラミガキ、詳細不明	覆土
164	壺	-	-	-	1/6		口縁：ハケ→ナデ、頸部：波状文→右回り等間隔止め縷状文→鋸歯文状の波状文	磨耗詳細不明	覆土
165	壺	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め縷状文→波状文（全周しない）	横ハケ→ナデ、ヘラミガキ	トレンチ、覆土
166	壺	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め縷状文→波状文（波状文は順形展開）	横ハケ	覆土
167	壺	-	-	-	1/4		頸部：櫛直線文2	胴部：ハケ→ナデ 頸部：ミガキ、胴部：ナデ	覆土
168	壺	-	-	-	1/3		口縁：ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め縷状文→鋸歯文状の波状文→笠沈線充墳	ハケ→ナデ	覆土
169	壺	-	6.0	-	2/3		胴部：ハケ→ヘラミガキ、底部：ナデ	ハケ→ナデ	覆土
170	壺	-	8.6	-	2/3		胴部：ハケ：ナデ、ヘラミガキ 底部：ヘラケズリー→ナデ	ハケ→ナデ	覆土
171	鉢	15.2	4.2	6.6	3/4		ヘラミガキ・赤彩、底部両辺ヘラケズリ、底部：ヘラケズリー→ナデ	ヘラミガキ・赤彩	床直上
172	鉢	14.9	-	-	1/6		片口、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土上層
173	高坏	17.0	-	-	1/3		ハケorヘラケズリー→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
174	高坏	-	9.4	-	1/2		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、頸部：ハケ→ナデ	覆土
175	高坏	-	-	-	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土上層
20号住居址									
176	壺	18.6	-	-	1/2		口縁：強横ナデ・ハケ 頸部：右回り等間隔止め縷状文2（上→下）	強横ナデ、ハケ（ヘラミガキなし）	柱穴内
177	壺	-	-	-	1/6		頸部：2本一対の匙切丁字文→波状文 胴部：ハケ→ヘラミガキ	ハケ・ナデ	柱穴内
178	壺	-	-	-	1/4		頸部：左回り等間隔止め縷状文→波状文→笠描鋸歯文、胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	覆土
179	壺	-	-	-	1/4		口縁：ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め縷状文2（上→下） 胴部：磨耗不明	磨耗詳細不明	覆土
180	壺	-	9.5	-	2/3		胴上部：縄文、ハケ→ナデ、胴下部：ハケ→ヘラミガキ	底部：ヘラケズリー→ナデ	覆土・柱穴内
181	壺	18.7	-	-	1/10		ナデ	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
182	壺	-	-	-	1/6	○	頸部：左回り等間隔止め縷状文2（上→下）→遺状工具交互刻突文、胴部：2本一対の匙による、口の字意ね?	エビナデ	覆土下層
183	壺	14.0	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縷状文、胴部：波状文2、縦ヘラミガキ	口縁：横ナデ、胴部：ヘラミガキ	覆土
184	壺	22.6	-	-	1/10		横ナデ	横ナデ	覆土
185	壺	13.0	-	-	1/8		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縷状文	横ナデ	覆土下層
186	壺	11.4	-	-	1/10		口縁：磨耗詳細不明、頸部：右回り2連止め縷状文	磨耗詳細不明	覆土
187	壺	-	7.4	-	完		縦ヘラミガキ、底部：ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土下層
188	高坏	26.2	-	-	1/4		口唇：山形突起・刻み、坏部：ハケ→ナデ	ヘラミガキ・赤彩	覆土
189	高坏	-	12.4	-	1/6		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	柱穴内
21号住居址									
190	壺	17.6	-	-	1/4		磨耗、詳細不明	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
191	壺	-	-	-	1/6		口縁：剥落、詳細不明 頸部：右回り等間隔止め縷状文→波状文	ハケ→ヘラミガキ	トレンチ、覆土
192	壺	-	-	-	1/8		頸部：櫛直線文?→円形浮文→波状文2	磨耗詳細不明	覆土

表8 出土土器調査表⑦

No	器種	法量 (cm)			遺存 度	胎土	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
22号住居址									
193	壺	24.2	-	-	完		口縁：磨耗詳細不明 頸部：篋描直線文	口縁：ヘラムミガキ・赤彩 頸部：ナデ	床直上
194	壺	14.4	-	-	3/4		口縁：肌織文、斜ハケ、頸部：右回り等間隔止め縹状文→波状文、胴部：ハケ→ヘラムミガキ	口縁：強横ナデ・ハケ→ヘラムミガキ、胴部：ナデ	覆土下層
195	壺	21.4	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、ハケ	横ナデ	覆土
196	壺	17.4	-	-	1/4		口縁：ハケ→ナデ	ハケ→ヘラムミガキ・赤彩	覆土
197	壺	-	-	-	1/4		頸部：篋切丁字文（直線文3上→下）→竹管刺突充填跡画文	ハケ→ナデ	覆土
198	壺	-	-	-	3/4		頸部：3本→1本の篋状工具による右回り等間隔止め縹状文2 胴部：ハケ→ヘラムミガキ	頸部：ハケ→ヘラムミガキ 胴部：ハケ	覆土下層
199	壺	-	8.4	-	3/4		胴上部：ハケ→ヘラムミガキ、胴下部：ハケ 底部：ヘラムミガキ	ハケ	覆土
200	壺	-	11.0	-	2/3		底部周辺：ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ→ナデ	ナデ	覆土
201	壺	-	4.2	-	完		胴部：ナデ・赤彩、底部：ヘラケズリ	口縁：赤彩、内部に赤色顔料遺存	覆土下層
202	壺	25.9	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	口縁：ハケ→横ヘラムミガキ、頸部：ハケ→ナデ	覆土
203	甕	23.4	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、波状文1、頸部：右回り等間隔止め縹状文1、波状文1、胴部：磨耗詳細不明	口縁：ハケ→強横ナデ、胴部：ハケ（ヘラムミガキなし）	覆土
204	甕	-	7.4	-	1/4		ハケ 底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ（ハケ原体は外面と異なる）	覆土
205	甕	21.6	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	口縁：強横ナデ、頸部：ハケ→ナデ	覆土
206	甕	16.8	-	-	1/6		口唇：面とり 口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	横ナデ	覆土
207	甕	20.0	-	-	1/10		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文	ハケ→横ナデ	覆土
208	甕	16.7	-	-	1/10		口縁：櫛波状文2（上→下）	横ヘラムミガキ	覆土
209	甕	15.5	-	-	1/4		口縁：櫛波状文、磨耗詳細不明	横ヘラムミガキ	覆土
210	甕	16.9	-	-	1/8		口縁：櫛波状文3、磨耗詳細不明、頸部：右回り縹状文	横ヘラムミガキ	覆土
211	甕	11.6	-	-	2/3		口縁：櫛波状文2（上→下）、頸部：右回り2連止め縹状文 胴部：波状文	横ヘラムミガキ	床直上
212	甕	-	-	-	1/4		口縁：ハケ→ナデ、頸部：右回り等間隔止め縹状文、胴部：波状文	口縁：ハケ→ヘラムミガキ、胴部：ハケ	覆土下層
213	甕	-	-	-	1/8		頸部：右回り等間隔止め縹状文2（上→下）→波状文、胴部：櫛単斜線文？	磨耗詳細不明	覆土
214	甕	-	-	-	1/4		口縁：ヘラムミガキ、頸部：櫛直線文→波状文	磨耗詳細不明	覆土
215	甕	-	-	-	1/4		頸部：右回り等間隔止め縹状文2（上→下）→波状文、胴部：櫛縦羽状文	頸部：磨耗不明、胴部：ハケ（ヘラムミガキなし）	覆土
216	鉢	18.0	-	-	1/4		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土
217	高坏	18.8	-	-	1/6		ヘラムミガキ・赤彩	ヘラムミガキ・赤彩	覆土
218	高坏	18.8	-	-	1/6		ヘラムミガキ・赤彩	ヘラムミガキ・赤彩	覆土
219	高坏	-	15.2	-	3/4		ヘラムミガキ・赤彩	坏部：ヘラムミガキ・赤彩、胴部：ハケ→ナデ	覆土
23号住居址									
220	壺	22.2	10.6	48.2	3/4		口唇：ヘラムミガキ・赤彩、口縁：ハケ・ナデ、頸部：篋切丁字文（直線文4上→下）→縹画文、胴部：ヘラムミガキ	口縁：ヘラムミガキ・赤彩、胴部：ヘラムミガキ・ナデ	覆土下層
221	壺	17.6	-	-	2/3		口縁：強横ナデ、頸部：篋切丁字文	ヘラムミガキ・赤彩	床直上
222	壺	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め縹状文→彫画文	横ナデ	覆土
223	壺	20.9	-	-	1/2		口縁：強横ナデ・ハケ 頸部：篋描縦羽状文	横ハケ→ナデ	床直上
224	壺	17.6	-	-	3/4		口縁：強横ナデ、波状文1 頸部：波状文3（上→下）→下層、篋沈線区画	口縁：ハケ→ナデ 頸部：ナデ	覆土下層→床直上

表9 出土土器調査表⑧

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
225	壺	-	-	-	1/4		頸部: 柳直線文or T字文→波状文2、胴部: ハケ→ヘラミガキ	剥落詳細不明	覆土下層
226	壺	-	5.8	-	完		胴部: ハケ→ヘラミガキ 底部: ナデ	口縁: 磨耗詳細不明、胴部: ハケ・ナデ	覆土下層
227	-	-	-	-	-		口唇: つまみ上げ状の横ナデ、口縁: 横ナデ	横ナデ	覆土
228	壺	-	-	-	1/3		頸部: 逆切T字文(直線文3上→下)→縦歯文	ハケ→ナデ	覆土上層
229	壺	-	-	-	1/3		口縁: ハケ→ナデ 頸部: 柳直線文	ナデ(磨耗不明)	床直上
230	壺	20.8	-	-	1/8		ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
231	壺	-	-	-	1/3		ハケ	剥落、詳細不明	覆土下層→床直上
232	坏	6.9	3.3	2.3	1/4		ユビナデ	ユビナデ	床直上
233	甕	-	-	-	1/10		頸部: 右回り等間隔止め簾状文 胴部: 波状文3(上→下)→縦羽状文	ハケ→ヘラミガキ	覆土下層
234	甕	-	-	-	1/8		頸部: 右回り等間隔止め簾状文 胴部: 波状文(右回りの区画単位施文)	横ヘラミガキ	トレンチ、覆土上層
235	鉢	17.6	5.3	7.5	1/3		口縁: 強横ナデ、体部: ヘラケズリ→ナデ 底部: ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層→床直上
236	高坏	19.8	-	-	1/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
237	高坏	-	9.5	-	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	柱穴内
24号住居址									
238	壺	16.8	-	-	1/3		ナデ	ナデ	覆土
239	壺	18.4	-	-	1/6		ハケ→ナデ	ナデ	覆土
240	壺	14.9	-	-	3/4		口縁: 横ナデ、頸→胴上部: ハケ→ヘラナデ	口縁: ハケ→横ナデ 胴部: ハケ	覆土
241	壺	-	-	-	1/2		口縁: ハケ(剥落不明)、頸部: 右回り等間隔止め簾状文2(上→下)→波状文	口縁: ハケ→横ナデ、頸部: ナデ	覆土
242	壺	-	9.8	-	1/3		ハケ→ナデ、底部: ヘラケズリ	ハケ→ナデ	覆土
243	甕	23.1	-	-	1/8		口縁: 横ナデ、波状文1 頸部: 右回り等間隔止め簾状文2(上→下)→波状文	口縁: 横ナデ、胴部: ナデorヘラミガキ	覆土下層→床直上
244	甕	12.9	-	-	1/10		口唇: 紅縄文、口縁: 横ナデ、頸部: 右回り等間隔止め簾状文	ナデ	覆土
245	蓋	-	-	-	1/3		つまみ: 指頭押捺→ユビナデ、体部: ハケ	つまみ: ナデ、体部: ヘラケズリ→ナデ	柱穴内
246	高坏	-	12.5	-	1/4		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
247	高坏	-	13.0	-	1/2		ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
25号住居址									
248	壺	17.3	-	-	1/3		口縁: ヘラミガキ? (磨耗不明)、頸部: 柳直線文or簾状文(磨耗不明)	ナデ→ヘラミガキ(磨耗不明)	覆土下層→床直上
249	壺	13.6	-	-	1/3		口縁: ハケ→強横ナデ、頸部: 右回り等間隔止め簾状文2(上→下)	口縁: ヘラミガキ・赤彩 頸部: ナデ	覆土
250	壺	18.5	-	-	1/6		ハケ	ハケ→横ナデ	柱穴内
251	壺	25.7	-	-	1/10		ハケ→強横ナデ	ヘラミガキ・赤彩	覆土
252	壺	-	-	-	1/4		口縁: ハケ→ナデ 頸部: 右回り等間隔止め簾状文	ハケ→ナデ	覆土
253	壺	-	-	-	1/3		右回り等間隔止め簾状文2	口縁: ヘラミガキ・赤彩、頸部: ハケ→ナデ	覆土
254	壺	-	-	-	3/4		口縁: ハケ→ナデ、頸部: 右回り等間隔止め簾状文→縦歯文、胴部: ハケ→ヘラミガキ	口縁: ヘラミガキ、胴部: ハケ→ナデ	覆土下層→床直上
255	壺	-	-	-	1/3		口縁: ヘラミガキ、頸部: 右回り等間隔止め簾状文2(上→下) 胴部: ハケ→ヘラミガキ	口縁: 横ナデ、胴部: ハケ、ヘラケズリ	柱穴内
256	甕	-	7.0	-	2/3		ヘラミガキ、底部: ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ヘラミガキ	床直上

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外	内	
257	壺	-	-	-	1/2		ハケ→ナデ	ハケ	床直上
258	甕	-	-	-	1/3		頸部：右回り等間隔止め籬状文3（上→下）、胴部：波状文2	ハケ（ヘラミガキなし）	覆土下層～床直上
259	甕	15.0	-	-	1/3		口唇：山形突起+筋み、口縁：櫛波状文、頸部：左回り等間隔止め籬状文2、波状文1、胴部：ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ、胴部：ヘラケズリ	床直上
260	高坏	17.2	9.7	15.9	3/4		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：横ナデ	床直上
261	高坏	15.8	-	-	1/10		ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層～床直上
262	鉢	-	7.0	-	1/3		ヘラミガキ・赤彩、底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	床直上
26号住居址									
263	壺	16.4	-	-	3/4		口縁：強横ナデ、縦ヘラミガキ、頸部：篋切T字文（直線文2）→篋描断歯文	口縁：ヘラミガキ、頸部：ナデ	覆土下層
264	壺	8.2	-	-	1/2		口縁：磨耗詳細不明 頸部：右回り等間隔止め籬状文	磨耗詳細不明	覆土
265	壺	19.6	-	-	1/10		強横ナデ、磨耗詳細不明	強横ナデ、磨耗詳細不明	覆土上層
266	壺	18.8	-	-	1/10		磨耗詳細不明	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
267	壺	-	-	-	1/6		頸部：篋描横羽状文→断歯文	ナデ	覆土上層
268	壺	-	-	-	1/4		口縁：ハケ→ナデ、頸部：篋切T字文	磨耗詳細不明	覆土
269	壺	-	-	-	1/2		篋描横羽状文→断歯文、胴部：磨耗不明	ナデ	覆土下層
270	甕	-	7.5	-	1/3		縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土下層
271	甕	12.0	-	-	1/4		口縁：強横ナデ 頸部：右回り等間隔止め籬状文	口縁：強横ナデ、頸部：ナデ	覆土下層
272	鉢	12.4	-	-	1/8		口縁：横ナデ、体部：ヘラケズリ	ヘラケズリ	覆土下層
273	高坏	-	10.8	-	3/4		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	覆土下層
274	鉢	21.0	7.2	10.2	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層
27号住居址									
275	壺	-	-	-	完		口縁：ハケ→ヘラミガキ、頸部：篋描横羽状文→断歯文	ヘラミガキ？剥落詳細不明	覆土下層～床直上
276	壺	-	-	-	1/4		半截竹管連続刺突+波状文→右回り等間隔止め籬状文2	口縁：赤彩、頸部：ナデ	覆土
277	壺	-	-	-	1/4		頸部：櫛波羽状文、胴部：ヘラミガキ・赤彩	ハケ	覆土
278	甕	12.7	-	-	1/8		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文	強横ナデ	覆土
279	甕	16.6	-	-	1/10		口唇：R1縄文、口縁：横ナデ	横ナデ	覆土下層～床直上
280	甕	19.2	-	-	1/10		ハケ→強横ナデ	ナデ	覆土
281	甕	-	-	-	1/3		頸部：櫛波直線文2、胴部：波状文3→半断斜条痕	ハケ→ヘラミガキ	覆土
282	甕	-	-	-	1/8		頸部：直線文or籬状文、胴部：波状文→半断斜条痕or縦羽状文	ハケ→ナデ	覆土
283	甕	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め籬状文→波状文、胴部：赤彩（剥落、詳細不明）	口縁：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ナデ	覆土
284	壺	-	5.8	-	1/3		ハケ→ナデ・赤彩	ナデ	覆土下層～床直上
285	鉢	15.3	-	-	1/6		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	覆土
286	高坏	25.2	-	-	1/10		口唇：ヘラ割み、坏部：ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層～床直上
287	鉢	20.4	-	-	1/8		ハケ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	覆土下層～床直上

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外	内	
28号住居址									
288	壺	23.6	-	-	1/3		口縁：ハケ（剥落、詳細不明）、頸部：2本一対の篋切T字文、胴部：ハケ	ハケ→ナデ（磨耗詳細不明）	覆土
289	壺	-	-	-	1/4		頸部：櫛直線文2→波状文	磨耗詳細不明	覆土下層～床直上
290	壺	-	-	-	1/3		口縁：ハケ→ナデ？ 頸部：篋切T字文（直線文2）	磨耗詳細不明	覆土
291	壺	-	8.6	-	2/3		頸部：ハケ、底部周辺：ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ハケ、磨耗詳細不明	炉
292	壺	-	-	-	完		剥落、詳細不明	剥落、詳細不明	炉
293	壺	15.9	-	-	3/4		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文→波状文、胴部：ハケ→ナデ・ヘラミガキ	口縁：強横ナデ、胴部：磨耗、詳細不明	覆土下層～床直上
294	壺	8.3	-	-	1/2		口縁・胴部：磨耗、詳細不明、頸部：右回り等間隔止め籬状文	磨耗、詳細不明	床直上
295	壺	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め籬状文→胴部：波状文3 胴下部：磨耗、詳細不明	ハケ、磨耗詳細不明	覆土
296	壺	-	-	-	1/10		磨耗詳細不明、頸部：篋切T字文	ハケ→ヘラミガキ、磨耗詳細不明	覆土
297	高坏	24.8	-	-	1/10		ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
1号井戸址									
298	壺	17.6	-	-	1/10		口縁：波状文1 頸部：右回り等間隔止め籬状文	横ヘラミガキ	覆土
299	壺	9.9	5.6	9.3	完		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文、胴部：ハケ→ナデ・ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ 口縁：強横ナデ	胴部：ハケ→ヘラケズリ	覆土
遺構外									
300	壺	20.6	-	-	1/8		口縁：強横ナデ、ハケ	横ナデ	
301	壺	22.3	-	-	1/8		剥落、詳細不明	ハケ→横ナデ	
302	壺	16.4	-	-	1/6		横ナデ	横ナデ	
303	壺	12.7	-	-	1/2		口縁：強横ナデ、ハケ、頸部：櫛直線文？	磨耗、詳細不明	
304	壺	-	-	-	1/3		口縁：ナデ→ミガキ、頸部：櫛直線文2 胴上部：波状文3（上→下）	ハケ	
305	壺	-	7.4	-	1/3		頸部：篋横羽状文→彫曲文、胴上部：ハケ→ヘラミガキ、胴部：ハケ	ハケ	
306	壺	-	9.3	-	1/2		ハケ→ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
307	壺	12.0	-	-	1/8		ナデ	ナデ	
308	壺	25.6	-	-	1/10		口縁：強横ナデ	磨耗、詳細不明	
309	壺	22.3	-	-	1/4		口縁：横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文→波状文3（上→下）	ハケ→横ヘラミガキ	
310	壺	25.0	10.4	34.5	1/3		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文→波状文、胴部：櫛直線文、ハケ	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ナデ	
311	壺	22.5	7.5	28.2	1/3		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文2（上→下）、胴上部：波状文、胴下部：ハケ	口縁：強横ナデ、胴部：ヘラケズリ	
312	壺	23.3	-	-	1/8		口縁：磨耗、詳細不明 頸部：右回り等間隔止め籬状文	磨耗、詳細不明	
313	壺	21.8	-	-	1/10		ハケ→横ナデ 頸部：右回り等間隔止め籬状文	横ナデ	
314	壺	19.5	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、波状文1、頸部：右回り等間隔止め籬状文2→波状文1	口縁：ハケ→強横ナデ、胴部：ナデ（ヘラミガキなし）	
315	壺	20.0	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文、胴部：櫛直線文	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ナデ（ヘラミガキなし）	
316	壺	22.0	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文2、胴部：磨耗、詳細不明	口縁：強横ナデ、胴部：ナデ	
317	壺	17.1	-	-	1/8		口縁：ハケ→強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文	強横ナデ	
318	壺	16.0	-	-	1/4		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め籬状文	強横ナデ	

No	器種	法儀 (cm)			遺存度	胎土	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
319	甕	14.4	-	-	1/10		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	強横ナデ	
320	甕	14.4	-	-	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ナデ	
321	甕	13.9	-	-	1/4		横ナデ	横ナデ	
322	甕	-	-	-	1/6		頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：波状文	磨耗、詳細不明	
323	高坏	16.6	-	-	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
第1次調査 4号住居址									
324	壺	23.0	-	-	1/2		口縁：縦ハケ→横ナデ 頸部：右回り等間隔止め簾状文2 (上→下)、ハケ	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：ハケ→ナデ	
325	壺	23.0	-	-	1/3		口縁：ハケ→ナデ、肩部強横ナデ 頸部：柳直線文or簾状文 (詳細不明)	横ハケ→軽いヘラミガキ	
326	壺	-	-	-	1/6		口縁：ハケ→ナデ (磨耗不明) 頸部：篋切りT字文	横ヘラミガキ	
327	壺	15.0	-	-	1/3		口縁：ハケ→ナデor磨き、頸部：篋切りT字文→波状文 胴部：ハケ→ナデorミガキ	口縁：横ヘラミガキ、胴部：ハケ→ナデ	
328	壺	22.0	-	-	1/10		口縁：ハケ→ナデ? (磨耗不明)	横ヘラミガキ・赤彩	
329	壺	22.0	-	-	1/10		ハケ→ナデ?	磨耗、詳細不明	
330	壺	21.2	-	-	1/10		磨耗、詳細不明	ヘラミガキ・赤彩	
331	壺	20.8	-	-	1/10		口唇：波状文1、口縁：ハケ→ナデ	磨耗、詳細不明	
332	壺	18.7	-	-	1/10		ハケ→ナデ	横ヘラミガキ・赤彩	
333	壺	17.2	-	-	1/8		ハケ→ヘラミガキ?	横ヘラミガキ・赤彩	
334	壺	-	-	-	1/4		頸部：篋切りT字文→波状文1	ハケ→ナデ	
335	壺	-	-	-	1/4		頸部：右回り等間隔止め簾状文→鬚歯文 (左回り論文)	磨耗、詳細不明	
336	壺	-	-	-	1/2		柳直線文→鬚歯文→円形浮文	頸部：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ハケ→ナデ	
337	壺	-	8.5	-	完		ハケ、胴部に内側より焼成後穿孔	ハケ	
338	壺	-	10.6	-	2/3		ハケ→ヘラミガキ、底部：ナデ	ハケ	
339	甕	18.6	-	-	1/2		口縁：波状文、横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文→波状文、胴部：柳単斜条痕	口縁：ハケ→軽いヘラミガキ、胴部：ハケ→ナデ	
340	甕	19.8	-	-	1/2		口縁：波状文1、頸部：右回り等間隔止め簾状文→波状文、胴部：柳縦羽状文	口縁：ハケ→横ナデ、胴部：ハケ→ヘラミガキ?	
341	甕	18.6	-	-	1/10		口縁：ハケ→強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	ハケ→横ヘラミガキ	
342	甕	19.2	-	-	1/4		口縁：波状文1	ハケ→横ナデ	
343	台甕	13.8	11.0	21.1	2/3		口縁：強横ナデ、頸部：右回り2連止の簾状文、胴部：波状文 脚部：ヘラミガキorナデ	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ	
344	甕	17.6	-	-	1/10		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	口縁：強横ナデ	
345	甕	18.8	-	-	1/8		口唇：L字線文 口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	口縁：強横ナデ	
346	甕	-	-	-	1/2		口縁：波状文1、頸部：右回り等間隔止め簾状文→波状文 胴部：柳縦羽状文	ナデ (ミガキなし)	
347	甕	-	-	-	1/6		胴部：ハケ→波状文	ハケ→ヘラミガキ	
348	甕	13.8	-	-	1/2		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：波状文	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ (ミガキなし)	
349	甕	13.8	7.1	16.1	1/2		口縁：横ナデ、胴部：無文 磨耗、詳細不明	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ナデ	
350	甕	12.8	-	-	1/3		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文 胴部：波状文	口縁：横ヘラミガキ、胴部：ハケ→ヘラミガキ	
351	甕	13.8	-	-	1/8		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文2 (上→下)	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ	

表12 出土土器調査表⑩

NO	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
352	甕	—	6.6	—	1/3		胴部：櫛縦羽状文、底部：ヘラケズリ	横ヘラミガキ	
353	高坏	17.1	7.1	14.8	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
354	高坏	20.2	—	—	2/3		ハケ→軽いヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	
第1次調査5号住居址									
355	壺	21.3	—	—	2/3		口縁：強横ナデ、ハケ 頸部：右回り2連止め簾状文2→縦歯文 胴部：ハケ→ヘラミガキ	口縁：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ハケ→ナデ	
356	壺	—	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：沈線区画	ハケ→ナデ	
357	壺	—	—	—	1/4		頸部：笠切り丁字文、胴部：ハケ→ヘラミガキ	頸部：ハケ→ナデ、胴部：ハケ	
358	壺	24.6	—	—	1/8		口縁：強横ナデ	ヘラミガキ・赤彩	
359	壺	18.0	—	—	1/10		磨耗不明	磨耗不明	
360	壺	22.6	—	—	3/4		ハケ→ナデ	ハケ	
361	壺	—	—	—	1/2		右回り等間隔止め簾状文2（上→下）→波状文	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：横ナデ	
362	壺	—	—	—	1/3		口縁：ハケ→ヘラミガキ、頸部：笠切り丁字文→縦歯文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：磨耗不明	
363	壺	—	7.6	—	1/5		口縁：ヘラミガキ・赤彩、頸部：右回り2連止め簾状文→波状文、胴部：複合縦歯文、ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩、胴部：ハケ	
364	壺	—	—	—	1/2		頸部：笠切り丁字文→波状文、胴部：ハケ→ナデ	ナデ	
365	壺	—	—	—	1/3		口縁：ハケ→ヘラミガキ、頸部：右回り等間隔止め簾状文→波状文、胴部：ハケ→ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ、胴部：ハケ	
366	壺	—	10.1	—	2/3		ハケ→ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ→ナデ	胴部：ハケ	
367	壺	—	10.8	—	1/3		ハケ→ヘラミガキ、底部：ヘラケズリ	ハケ、磨耗、詳細不明	
368	壺	—	9.8	—	2/3		縦ハケ→ナデ	ハケ	
369	甕	16.6	—	—	3/4		口縁：強横ナデ 頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：波状文	口縁：強横ナデ、胴部：ハケ→ヘラミガキ	
370	甕	16.2	—	—	1/6		口縁：強横ナデ、頸部：右回り等間隔止め簾状文	強横ナデ	
371	甕	—	—	—	1/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文、胴部：波状文	ヘラミガキ	
372	甕	—	7.8	—	2/3		胴部：櫛縦羽状文、底部：ナデ	ヘラミガキorナデ	
373	蓋	—	—	—	1/3		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
374	台甕	—	9.0	—	3/4		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
375	高坏	21.6	—	—	1/8		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
376	高坏	—	16.4	—	1/10		ヘラミガキ・赤彩	磨耗詳細不明	

表13 出土土器調査表⑩

3 第1・2次調査の概要

第1・2次調査は長野都市計画北部下水路埋設工事に伴う緊急発掘調査として、昭和50年・51年に長野市遺跡調査会によってそれぞれ実施されたものであるが、諸般の事情より、発掘調査報告書は刊行されていない。一部の出土土器が長野市立博物館に展示されているのみで、その内容については長く不明であった。

今回その一部について再整理を実施したためその概要についてここで報告するが、調査の諸記録が一部散逸しており、検出された遺構の状況等はきわめて断片的にしか紹介し得ぬてん、あらかじめお断りしておく。

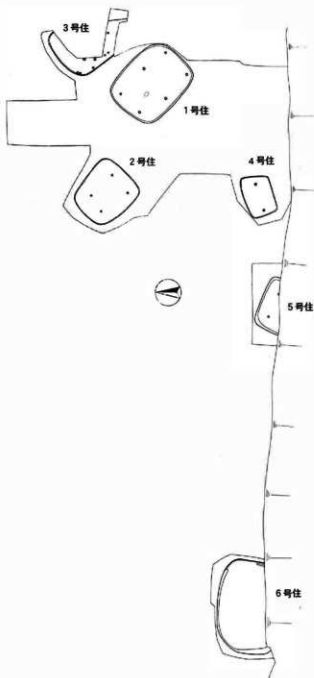
第1次調査

現在のグラウンド部分に下水路を埋設したときの調査（第4図）で、6軒の住居址が検出されている（第83図）。1～4号住居址は下水路埋設部分の調査、5・6号住居址はそれ以南がグラウンド造成に伴ってすでに削平されており、削平面断面の観察から検出した住居址と思われる。5・6号住居址以南にも遺構の存在は十分に推定されるが、グラウンド南端部分では遺物包含層自体が漸移的に消失する傾向が確認されているようで遺跡範囲からはずれる可能性が高い。

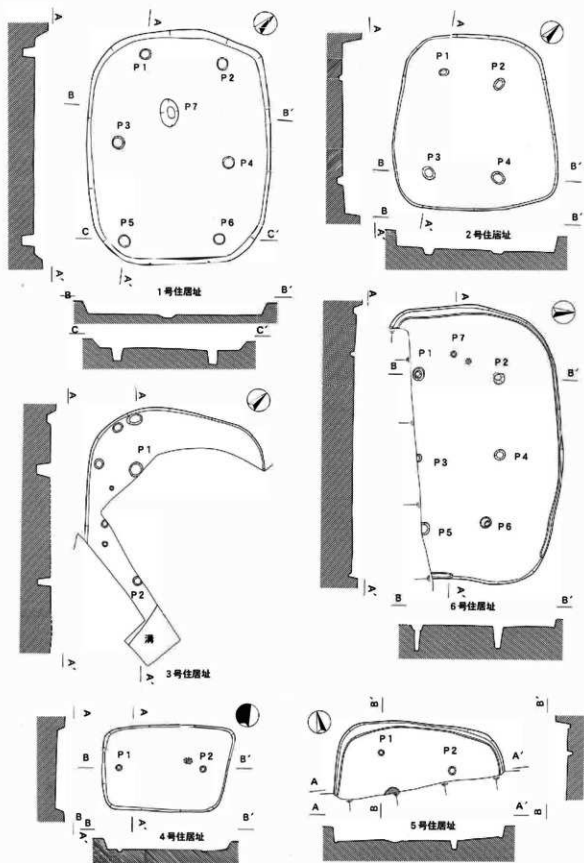
第2次調査

現在の管理混合教室等南側から、テニスコート東側にかけての下水路埋設部分の調査であるが、旧地形が大きく落ち込む状況が確認されており、遺構・遺物包含層の存在は確認されていない。

管理混合教室棟建て替えに伴う試験調査でも遺物包含層の存在は確認されておらず、第4次調査・調査区南側で旧地形の落ち込みに堆積したと考えられる礫層が確認されていることよりすれば、第4次調査区南端から第2次調査区にかけて、旧地形が大きく谷状に落ち込んでいる可能性が高いものと判断され、遺跡範囲の南端を示すものとらえられよう。



第83図 第1次調査検出遺構分布図（1：300）



第84图 第1次調査検出住居址実測図 (1 : 100)

第1次調査で検出された遺構と遺物

第1次調査では6軒の住居址が検出されているが、その概要は以下のとおりである。

1号住居址

平面プランは隅丸長方形を呈するが、短辺はやや胴張りぎみとなる。規模は長軸6.20m、短軸4.80mを測り、住居址主軸は北西方向にとる。柱穴はP1～P7が検出されている。P1・2・5・6を主柱穴と考えるならば、短辺2.10～2.40m、長辺4.60～4.90mの4本長方形の主柱穴配置となる。P3・4はともに長辺の主柱主軸よりやや外側に位置し、補助的な支柱ととらえられようか。炉・出入口施設等その他の施設は確認されていない。

2号住居址

平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、住居址主軸は北西方向にとるものと思われる。規模は一辺3.60～4.20mを測る。柱穴はP1～P4が検出されており、仮にこれらを主柱穴と考えると、短辺1.50～1.90m、長辺2.50～2.70mの4本長方形の主柱穴配置となる。炉・出入口施設等その他の施設は確認されていない。

3号住居址

住居址の一部を検出したのみで、規模等詳細は不明である。平面プランは隅丸長方形を呈すと考えられ、住居址主軸は北西方向にとる。住居址南東隅は、中世以降の溝に切られているようである。南西壁際にピットが集積して検出されているが性格は不明。主柱穴はP1・2と考えられる。炉等その他の施設は確認されていない。

4号住居址

平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸2.30mを測り、住居址主軸は北東方向にとるものと思われる。柱穴はP1・2の2本のみしか検出されておらず特異である。P2の内側に炭化物の堆積が確認されているが炉とは判断し得ない。覆土内から多量の土器群が出土しており、廃絶後の埋没過程に投棄されたものと想定される。本遺構を住居址とする積極的な根拠は存在しない。

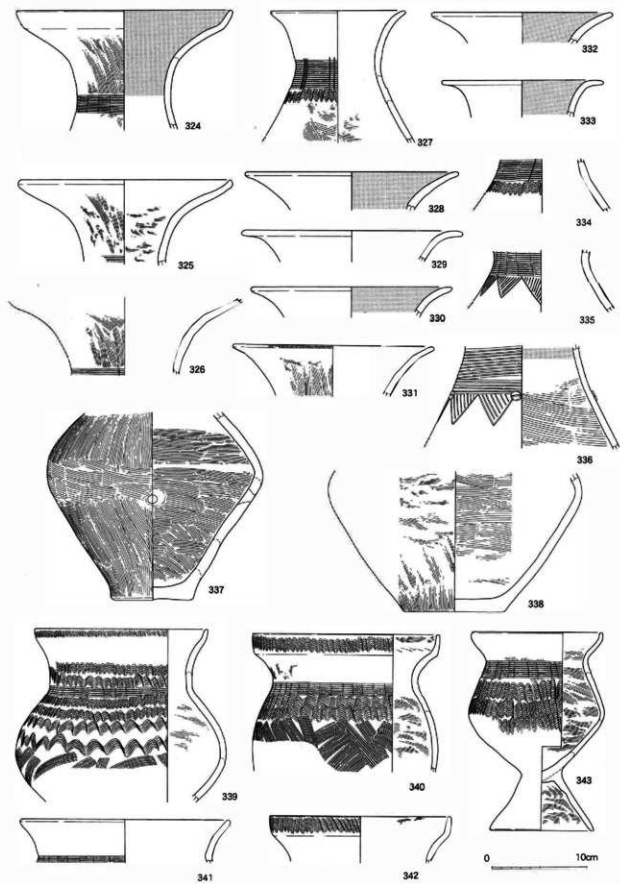
5号住居址

南側1/2程が削平されているが、平面プランは隅丸長方形を呈するものと想定される。規模は長軸4.40m、短軸(3.40m)を測り、住居址主軸は北西方向にとる。主柱穴はP1・2と考えられ4本長方形配列と想定される。炉は奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、地床炉である。壁際には壁周溝がめぐられて覆土内から多量の土器群が出土しており、4号住居址同様廃絶後の埋没過程に投棄されたものと想定される。

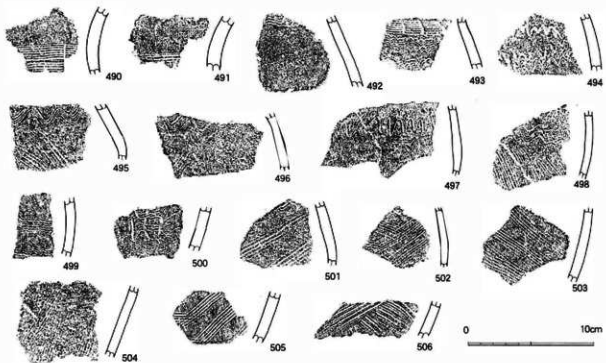
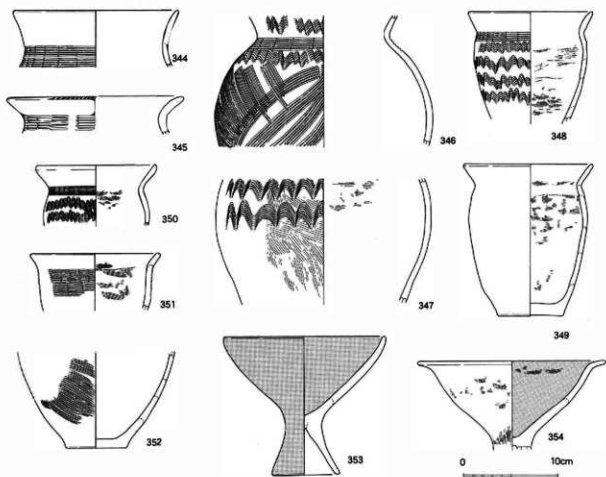
6号住居址

南側1/4程が削平されているが、平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸7.20m、短軸(4.50m)を測り住居址主軸は東西方向にとる。主柱穴はP1・2・5・6の4本長方形配列で、長辺3.90～4.10m、短辺1.80～2.10mを測る。P3・4はともに主柱主軸よりもやや外側に位置し、補助的な支柱と想定される。P7は棟持柱的な支柱であろうか。壁際には壁周溝がめぐる。炉・出入口施設等その他の施設は確認されていない。

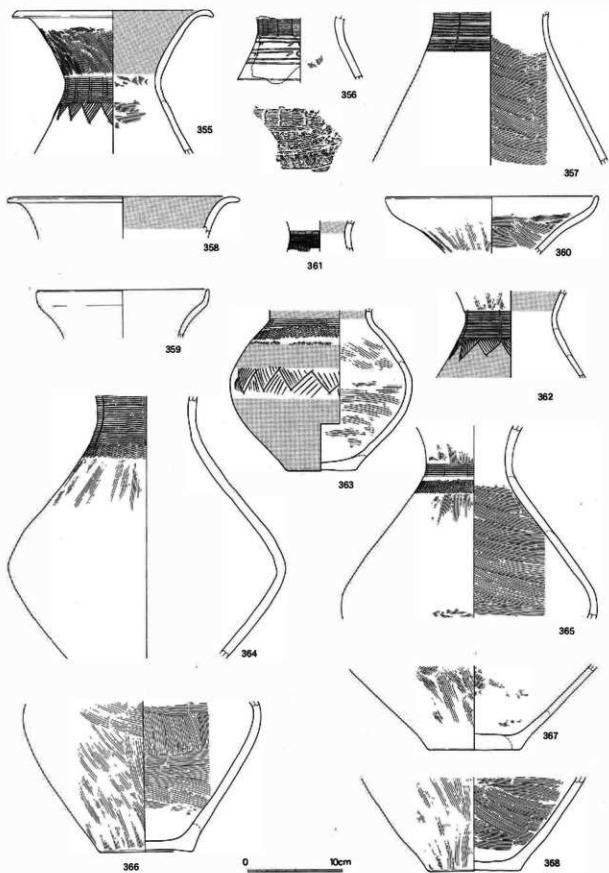
これらの住居址は、遺跡の性格・住居の構造等からいずれも弥生時代後期初頃の吉田式期に属すると想定されるが、4・5号住居址以外は出土遺物はきわめて少なく、詳細は不明な部分が多い。今回の再整理にあたって、図化した資料は4・5号住居址出土資料のみである。



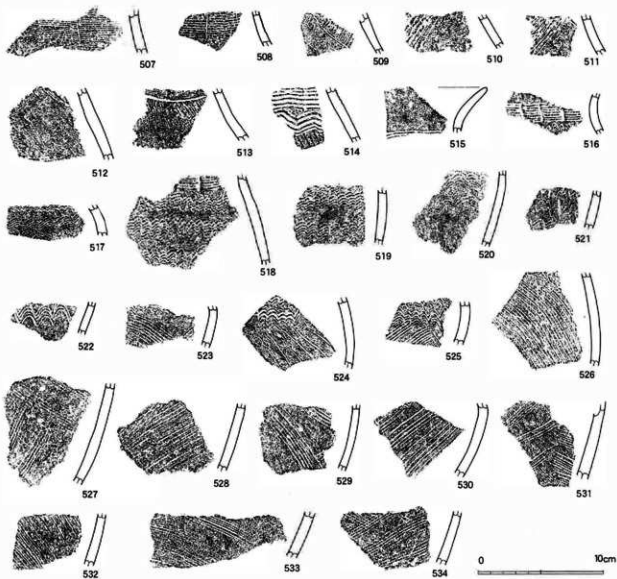
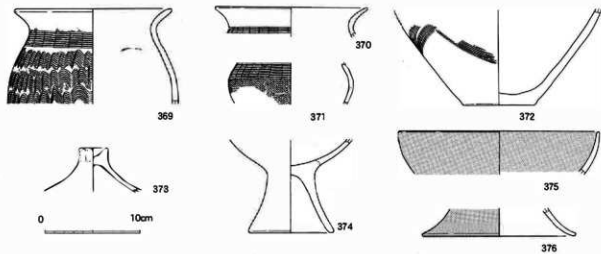
第85图 第1次調査4号住居址出土土器実測图①(1:4)



第86図 第1次調査4号住居址出土土器実測図②(1:4)ならびに出土土器拓影(1:3)



第87图 第1次調査5号住居址出土土器実測図①(1:4)



第88図 第1次調査5号住居址出土土器実測図②(1:4)ならびに出土土器拓影(1:3)

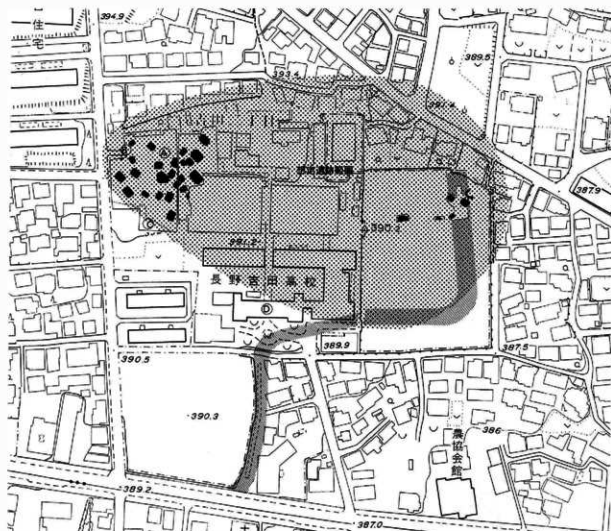
第4章 考 察

1 長野吉田高校グラウンド遺跡の遺跡範囲の想定

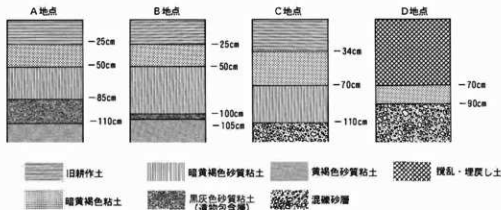
第1次調査から今回の第4次調査ならびに敷地内の試掘調査などの結果から、ある程度の遺跡範囲の想定が可能と思われるので、以下若干の考察を行って置く。

第3次調査ならびに第4次調査で検出された弥生集落部分の土層序は、基本的にA地点（第89図）で確認された土層序と同一といえる（第90図）。第1層は信大農場時代の旧耕作土であり、以下黄褐色粘土層、暗黄褐色砂質粘土層へと漸移的に移行する。遺物包含層である黒灰色砂質粘土層は、地表下85cm付近から確認でき、平均25～30cm前後と比較的厚い堆積を示し、さらに下層の黄褐色砂質粘土層へと漸移的に移行する。この黄褐色砂質粘土層は遺物の包含が認められず、自然層と理解されるもので、遺構の掘り込みも基本的には同層上面にて確認される。

第4次調査の調査区北西端にあたるB地点では、基本的な土層の堆積状況はA地点と同様ではあるが、遺物包含層の黒灰色砂質粘土層の堆積は5cm前後と浅い。また同層は北西方向に向かって漸移的に消滅して行く状況が認められ、B地点付近が遺跡の北西端に位置する可能性が高い。ただし第4次調査で、調査区南西部分で北西から南東方向に直線的にのびる形で検出された後世の自然流路の覆土内から、流込みの形で縄文期の土器や石器



第89図 遺跡範囲想定図（1：2,500）



第90図 各地点土層堆積状況模式図

が若干検出されていることを考慮すると、本遺跡の北西にさらに別の縄文期の遺跡が存在する可能性は否定できない。

C地点は第4次調査で、旧地形の落ち込みに伴う礫層が検出された部分で、第3層まではA地点と同様の堆積であるが、遺物包含層の黒灰色砂質粘土層は確認できず、地表下110cm付近で混雑砂層へと移行する。遺物包含層の黒灰色砂質粘土層が混雑砂層下に落ち込んで行く可能性も想定して、部分的にトレンチ調査も実施しているがそういった状況は認められていない。

D地点は管理混合教室棟の建替えに伴う試掘調査で確認されたもので、地表下70cmまでは旧校舎造成に伴う埋戻し土、さらに暗黄褐色粘土層を経て90cm付近から混雑砂層へと移行し、遺物包含層は確認されていない。

C地点-D地点のラインはほぼ地形の傾斜に沿っており、さらに南東の第2次調査地点でも遺構の存在がまったく確認されていないことよりすれば、C・D両地点の最下層で確認された混雑砂層は同一のものと判断され、C地点-D地点のライン以南には、大規模な自然流路もしくは谷状の地形の存在を想定することができ、おそらく遺跡範囲の南東端を画するものと想定される。

ただしこの混雑砂層下に、遺物包含層の黒灰色砂質粘土層が落ち込んで行く状況が認められなかったことよりすれば、本遺跡の形成時には上述の大規模な自然流路もしくは谷状の地形は、すでに埋没していたものと判断される。

遺跡の東側は第1次調査でほぼ同一時期の住居址群が検出されており、現在のグラウンドの北側1/3はほぼ遺跡範囲と想定することができるが、それ以东に範囲が広がるか否かは現状では不明である。1次調査5・6号住居址以南はグラウンド造成に伴ってすでに削平を受けていたが、5・6号住居址以南にも遺構の存在は十分想定しうる。ただしグラウンド南端部分では遺物包含層自体が漸移的に消滅する傾向が確認されており、遺跡範囲からははずれる可能性が高い。

遺跡範囲の北側についても、東側同様不明瞭といわざるを得ない。吉田式土器の型式設定資料は、吉田高校プール建設途上に見発されたものであり、遺物の出土状況はプール建設敷地のほぼ中央部とその東方に集中して発見され、これらの部分に何らかの遺構が存在した可能性が指摘されている(笹沢 1970)。少なくともプール部分までは遺跡範囲と想定されるものの、それ以北については想定される城をでないのが現状である。

以上、各地点における遺物包含層の存在状況等より、第89図示したのスクリーンゾーン部分約3,800m²について長野吉田高校グラウンド遺跡の遺跡範囲と想定しておくが、あくまで推測の城を出るものではなく、今後さらなる周辺部分の調査を経て、厳密に遺跡範囲を確定して行く作業が求められる。(千野)

2 出土土器の様相 —吉田式土器の基礎的検討—

今回の調査では、第1次調査の再整理資料も合わせると、計376個体の土器を図化した。また、既報告の第3次調査資料を含めると、700個体以上の土器を図化したこととなる。

これらの資料は遺構の切り合い関係の存在からも若干の時間幅の存在は予想され、また、土器各個体が有する諸要素の内にも、時間的な新旧関係を有することが理解される。しかし、住居廃絶後の埋没過程に投棄されたと考えられる資料が出土土器の主体であり、個々の遺構出土の土器を総体としてみた場合には、各遺構出土土器の間に時間的な先後関係を把握しうる明確な型式差を導き出し得ないのが現状であり、同一型式内における新古の様相差を推測するのが限界と考えられる。よって、ここでは第4次調査出土土器の基礎的な検討を行い、吉田式土器を理解するための一助としたい。

壺形土器

形態 全体的な器形は、最大径を胴部中位やや下半に有し、稜を形成せずに底部へと収約する形態を呈し、胴下半にて最大径となり稜を形成しながら底部へ収約する箱清水式とは明確な差異が見てとれる。口縁部形態は、その類型を第91図に示した。形態の上からは大きく受口型と外反型とに分類でき、それぞれの中で受口状の立ち上がりが大きく明瞭なものから、小さく不明瞭なものへ、外反の度合いが大きいものから小さいものへとといったバリエーションが存在する。さらに、詳細は文様の部分で後述するが、頸部文様の構成類型と、口縁部の形態類型との間に明確な相関関係は存在せず、いずれの文様類型も口縁部形態の各類型に採用されている状況が見てと

形態 文様	受口型		外反型	
	強 ←	→ 弱	弱 ←	→ 強
簡 描 文				
縞 描 文				
縞 描 文 付 加				
露 歯 文 付 加				

第91図 壺形土器口縁部形態の類型と構造

れる。先行する栗林式の壺口縁部形態や頸部文様の多様性、ならびに後続する箱清水式壺の口縁部形態は大きく外反するものに、頸部文様は挿描T字文へと基本的に統一されることを考えれば、まさに中期から、後期への変換点における諸要素の複合状況と理解できよう。

また、今回の調査ではこれら一般的な長頸壺の他に、やや特殊なものとして以下のものが出土している。23号住230は、口縁が内湾し内外面ともに赤彩される広口壺で、前後の時期に類例はない。1次調査5号住363も広口壺と思われるが、胴中に複合鋸歯文を施す。22号住194は受口状というより袋状口縁を呈する長頸壺である。16号住114は小型の長頸壺で、赤彩されるのみで施文されない。小型の長頸壺は栗林式後半から箱清水式まで量多くないものの普遍的に存在する。11号住9は頸部に簾状文、胴部上半に波状文といった変型の施文を行う壺で、壺に變型の施文を行う例は群馬県の樽式土器に多見され、その関連が注目される。

成形・整形 出土土器の器面の状況が悪く詳細な観察が不能な個体が多いが、整形の上で特徴的なものとして、刷毛整形痕の顕著な残存があげられる。後述する赤彩とも関連するが、壺の口縁部外面は基本的に赤彩されず、軽い磨きもしくはナダ調整が行われるのみで、縦～斜方向の刷毛整形痕が顕著に残される（160・176・194・220など）。また14・45・112・305・337などのように胴部外面全体にわたって刷毛整形痕を顕著にとどめるものも存在する。箱清水式の壺外面が磨きによって刷毛整形痕を丁寧に磨き消すことよりすれば、栗林式からの中期的伝統の残存ととらえられよう。また、外面胴部上半に明確に磨きが認められる個体も存在するが（2・160・194・220など）、磨きの方向は縦方向であり、胴部上半の磨きが箱清水式では基本的に横～斜方向、栗林式では縦方向であることよりすれば、これもまた中期的伝統の残存としてとらえられる要素である。

底部外面はほとんどが篋削りによって仕上げられ、篋削りのみのものと、篋削り後にナダ整形されるものが存在する。22号住200は底部周辺から胴部下半にかけても篋削りが認められる。また、12号住44・16号住107・25号住25は胴部内面にも篋削りの痕跡を明瞭に残す。底部外面の篋削りは別として、胴部内面の篋削りは栗林式では確認されておらず、新しい技法の出現といえる。

文様・装飾

口唇部・口縁部 壺の口唇部は基本的にナダ調整によって丸く仕上げられるのみで無文のものが多いが、例外的存在としてL Rの縄文を施すもの（16号住106）、面取りをして波状文を施すもの（1次調査4号住331）、山形突起を有するもの（17号住122）が存在する。壺口唇部の山形突起は前後の時期に量的には少ないものの普遍的に存在するが、この時期では例外的な存在である。19号住156は横ナダによる面取りがなされ、また小破片で詳細は不明だが、23号住227は口唇部につまみ上げ状の強い横ナダがなされ、北陸地方との関連が想定される。口縁部内面の赤彩とともに外面口唇部のみにも赤彩が認められるものに15号住95・19号住154・23号住220などがあるが、現状では吉田式期にのみ認められる口唇部装飾である。

口縁部への施文は受口状口縁のものに認められる。變同様受口状口縁の外面に一部の波状文を施すもの（13号住72・15号住94・23号住224）、L Rの縄文を施すもの（17号住126）が認められる。22号住194の縄文は原体は不明であるがR L状の特殊な縄文で、非常に細かく一見布の圧痕状に見える。20号住180の胴上半に施文されている縄文も同一で、3次調査2号住181にも認められる。

頸部文様 壺型土器の文様は、上述の口唇部・口縁部装飾や胴部文様を一部に残すものの、基本的には頸部ならびにその直下に文様帯が限定され、施文具・文様・文様構成などから第92図に示した類型に大きく分類可能である。栗林式に比べて文様帯幅が大きく減少し、地文としての縄文は基本的に消失する。篋描文と挿描文で描かれる基本文様と、さらに付加文としての鋸歯文と波状文が組み合わさることによって、多様な類型が構成される。

基本文様としての篋描文には直（横）線文（70・108）、簾状文を意識したと思われる押し引き直線文（7・198）、

横羽状文 (130・223) などがある。寛には葉林式から継続する棒状もしくは半葎竹管状の太いものと、吉田式で新たに出現する刃先状の鋭い工具の二者が認められるが、横羽状文や鋸歯文の施文には主として後者が用いられ、葉林式期のものとは明確に区別される。
















基本文様としての櫛描文には、直(横)線文(13・43・160・225等)、簾状文(1・3・44・72・176等)、T字文(12・76・105・220等)が存在し、それぞれに付加文としての鋸歯文や波状文が加えられる。基本文様として櫛描波状文を描くものには、波状文のみのもの(10・153)、波状文帯とその下端に1条の櫛描沈線を加えるもの(75・77・224)の2種類が認められ、付加文は加えられない。後者の櫛描沈線は付加文と考えるよりも、葉林式期の頸部文様が櫛描沈線区画を基本とし、区画内に櫛描文や櫛描文を充填するものが主体であることよりすれば、中期的手法としてとらえるべきであろう。

以上のように壺の頸部文様は上記の各類型に大別されるが、次に各類型間また類型内での各文様間での時間的な前後関係についてみておく。

中期から後期への文様の流れの中では、大枠として櫛描文主体から櫛描文主体へという図式がまず想定される。櫛描文系から櫛描文系へ、鋸歯文付加型から波状文付加型への移行が想定される。櫛描文系の類型には基本的に櫛描波状文の付加は認められないし、総体に櫛描文系の類型は文様帯幅の拡張傾向が顕著で、特に波状文が付加される類型にその傾向が強い点もその傍証となろう。

各文様類型の中では、T字文を基本文様とするものでは、単線のT字文(11等)から複線のT字文(12・288・327)へ、簾状文を基本文様とするものでは、等間隔止めのもの(1等)から多連止めの簾状文(355)への変化が類型内での時間的な変化を示す指標となるが、いずれも本遺跡出土資料の中では少数例にすぎない。19号住168は付加文としての鋸歯文が櫛描文で描かれており、これも文様要素としては後出性を示すものととらえられる。

この他に基本文様としての簾状文の下に、付加文としての斜走短線文が施されるもの(72・拓414・415)や、基本文様として櫛描短線による横羽状文を施文するもの(277・拓295・296)がある。これらは松本平の後期前半に多用される文様で、その関係にも注意する必要があるが、時間的にはやはり後出するものであろう。また交互刺突文など東北の天王山式系統の文様を有するものも存在するが、これらについては第3節にて説明する。さらに、破片資料ではあるが、箱清水式期に主体となる文様であるいわゆるT字文C(櫛描横線を縦方向の櫛描直線で切る文様)もこの段階で確認されている点は注意しておきたい(拓71・443・444)。ただし、冒頭にて述べたごとくこのように想定される文様間の時間差も、個々の遺構に立ち戻ると、各遺構出土土器群の間には時間的な先後関係を把握しうる明確な型式差を導き出し得ないのが現状である。

		単 独 型	鋸歯文付加	波状文付加
櫛 描 文 系	直線文			
	横羽状文			
櫛 描 文 系	簾状文			
	T字文			
	直線文			

第92図 壺型土器頸部文様の基本的類型と構造

最後に吉田式土器を特徴づける付加文としての鋸歯文の系譜について述べておく。型式設定者の笹沢は、当時の限られた資料の中から鋸歯文の系譜については北原式・恒川式など天竜川水系の土器群の影響を重視した(笹沢 浩 1970)。

しかし、近年先行する栗林式の資料の充実により、栗林式の中にその系譜を求



第93図 鋸歯文の成立過程模式図

めるべき蓋然性が高まっており、またその姿勢も公表されつつある(長野県埋蔵文化財センター1998)。

第93図にその成立過程を模式的に示したが、整理すると以下のようにとらえられよう。第1段階は、縄文地文上に沈線区画された複数の文様帯の最下段に、篋描山形文(波状文)を施文する文様帯の出現である。この文様構成は栗林式壺の中でも、当初から頸部にのみ文様が施文されるタイプの壺の主文様とはならず、頸部から胴中位まで多段帯状の文様を施文する類型の中に、反復して用いられる文様パターンであり、文様の頸部への収約化とともに出現する文様ととらえられよう。第2段階は、最下段の沈線区画が消失し、篋描山形文(波状文)が付加文に独立する段階であり、地文としての縄文は依然残存するが、文様類型によっては文様帯全体にわたって地文の縄文が消失するなど、ある程度の多様性の存在は当然予想される。第3段階は、文様帯から地文の縄文が基本的に消失し、頸部の基本文様が篋描文化し、鋸歯文の中にも太い篋描斜線が充填される。第4段階は吉田式の段階で、各類型の基本文様に鋸歯文が付加される。第3段階との差異として基本文様における櫛描文系の出現、鋸歯文の施文が刃先状の工具によって描かれる細沈線が主体となること、また篋描文系の基本文様で沈線間に充填される文様がほぼ横羽状文に統一されるなどの要素がある。

鋸歯文の出現過程についてこのように考えてきたが、あくまでこれはきわめて図式的な理解であって、各段階にさまざまな類型が存在し、より複雑な変遷過程が存在することは当然予想される。しかし、いずれにせよ吉田式における鋸歯文の出現は決して唐突なものではなく、先行する栗林式の中から無理なくその系譜が追えることは明らかであり、むしろ問題とすべきは1次調査5号住363にみられる複合鋸歯文の方であろう。ただし、複合鋸歯文自体も量的には多くないものの栗林式の文様の中かなりの類別が認められることよりすれば、栗林式段階の複合鋸歯文の系譜こそ北原式・恒川式等天竜川水系の土器群の影響に求めるべきものであって、吉田式の複合鋸歯文は他の要素にも多々認められるごとく、栗林式の伝統の残存と理解すべきであろう。このように考えるならば、吉田式の成立にあたっては、少なくとも壺の文様要素の中では天竜川水系の影響を重視すべき必要性は少ないのであって、基本的には在地の栗林式土器からの変化として十分説明が可能であろう。

赤彩 吉田式の赤彩の手法は篋磨きと並行して行われるもので、基本的に箱清水式期の技法と同一である。また赤彩の顔料はベンガラである。壺の赤彩は小型壺(114)や広口壺(230・363)などの特殊なものを除くと、基本的に口縁部内面に限定され、ごく一部に外面口唇部にまで赤彩が及ぶものが存在する。頸部文様帯下まで赤彩が認められるものも存在するが(178・362)、少数例である。赤彩が施される割合も箱清水式期に比較すると非常に少なく、実測個体数からの算出ではあるが、赤彩個体は35%前後を占めるにすぎない。

粟形土器

形態 口縁部は頸部より短く緩やかに外反しつつ立ち上がり、胴部形態は胴上半(肩部)に最大径を有し倒卵形を呈するものを基本とするが、中・小型品の中には口縁部に最大径を有し、体部は頸部から直線的に底部へ収

約する深鉢形のものも若干存在する。

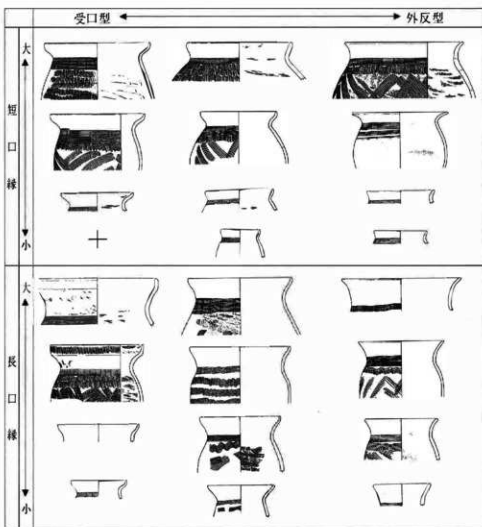
第94図に甕形土器の口縁部形態の類型を示した。口縁部が比較的短い短口縁型と長い長口縁型とに分類可能で、それぞれの類型の中で受口状の立ち上がりが大きく明確なものから小さく不明瞭なものへ、外反の度合いが大きいものから小さいものへといった多様性が存在する点は壺の口縁部形態の類型と同様である。さらに、これらの多様性は容量の大小に関係なく存在している状況がうかがわれる点は、甕の特殊な一面を示すものかも知れない。

先行する栗林式の口縁部形態が、受口型か

ら外反型までさまざまな多様性を有し、基本的には頸部から短く外反して終わる形態が中心となり、後続する箱清水式の口縁部形態は、少なくとも善光寺平南部では基本的に外反型に統一され、頸部から大きく長く外反する形態が中心となる状況を考慮するならば、壺同様中期から後期への変換点における諸要素の複合状況をここにも見てとることができよう。また前後の時期の口縁部形態の特徴から、吉田式の甕にあっては短口縁型から長口縁型へ、受口型から外反型への推移が当然予想されるが、時期的に明確に分離することは現状では困難である。

成形・整形 甕の整形上の特徴としてまず口縁部の強い横ナデがある。口縁部外面は受口のものを除いて、基本的には横ナデのまま無文で残されるものが圧倒的に多い。栗林式の甕は、短く外反して終わる口縁部外面には受口型の類型を除いて基本的に文様が施文されず、箱清水式は口縁部の伸長化とともに、同部分にも波状文が充填されることよりすれば、まさにその過渡的様相と理解できる。

今回の調査で確認された整形技法で注目されるのは、篋削り技法の存在である。内面調整に篋削りが認められるもの(16・23・50・92・150・259・299・311)や、外面調整に篋削りが認められるもの(16・299)である。底部調整は別として、内外面調整に篋削りを使用することは栗林式には認められず、新しい技法の出現といえる。天龍川水系の中期～後期前半の土器群の中には篋削り技法の存在は確認されておらず、その系譜は北陸地方との関連を想定する以外にはないものと現状では判断される。篋削り技法は底部調整以外では、後続の箱清水式に継承され



第94図 甕形土器口縁部形態の類型と構造

ることなく、再び確認されるのは箱清水式の終末期に外系土器群の影響を受けた段階である。

全体に器面の荒れが著しく詳細が不明な個体が多いが、内面荒磨きが明確な個体も少ない。口縁部に波状文が施文される個体は時間的後出性もあってか内面の荒磨きが比較的明瞭に行われるが、口縁部が無文の個体で明確に荒磨き認められるものには22・24・183・233・369等があるにすぎない。これに対して内面が刷毛整形されるのみのものには17・20・49・61・100・258・310・343等があり、ナデ整形されるのみのものには19・316がある。従来中期～後期にわたって継続し、中部高地型櫛描文を有する土器に通用の整形技法として荒磨き技法が目ざされてきたが、荒削り技法とともに、各技法の消長を視野に入れた細かな検討が必要とされよう。

文様・装飾

口唇部・口縁部 甕の口唇部は基本的にナデ調整によって丸く仕上げられるのみで無文のものが多いが、荒削りを行うもの（17・26・拓22・41・73・74・95）、波状文を施文するもの（145）、縄文を施文するもの（244・279・345）などが例外的に存在する。24・259は頂部に刻みを入れた山形突起を有するが、甕口縁部に山形突起を付す類型は在地にはなく天王山式土器の影響も考えられる。

口縁部は前述のごとく、受口型のを除いて横ナデされたまま無文で残されるのを基本的特徴とする。受口型のは外面に一定の櫛描波状文を施文するものが存在するが、外反型同様無文のまま残されるものも多い（16・145等）。

頸部・胴部文様 第95図に変形土器の頸・胴部文様の類型を示した。頸部に基本文様としての簾状文を施文した後に、胴部上半～中位に櫛描文を充填する充填文系と、頸部だけに文様が施文される、もしくはまったく文様が施文されない省文系に大別され、充填文系はさらに胴部に櫛描波状文のみが施文される波状文型と、波状文に櫛描縦羽状文が組み合わされる羽状文型に分類される。





基本文様としての頸部の簾状文は右回りの等間隔止め簾状文が主体で、複帯構成をとるもの（145・148等）が多いのも特徴といえる。羽状文型では、縦方向の櫛描羽状文を描くのが主体だが、単斜条痕も第3次資料中にはかなり存在し、時間幅の存在が見てとれる。また羽状文自体が栗林式の伝統の残存ととらえられ、基本的な推移は羽状文型から波状文型へと想定される。

波状文の類型には口縁部にまで波状文が施文される26・44・55・208～211等も存在し、後続する箱清水式へ連なっていく要素として注目されるが、量的には僅かに確認されているにすぎない。波状文の施文に関して、中部高地型櫛描文の特徴的な施文方法として、器面を縦に分割し分割した空間ごとに波状文を充填していく手法があり、栗林式から箱清水式まで継続するこの手法を、条痕文施文以来の地域的伝統の継続とする評価もある（安藤広道1999）。むしろこの手法は吉田式のなかにあっても中心的な手法といえる。ただし、器面の荒れや破片資料が多く断定しかねるものの、吉田式の中には施文の断絶がきわめて少なく振幅の整った畿内型類似の櫛描波状文が

存在するのも事実である

（56・145・212・3次調査283）。

前述の整形技法における荒削り技法の出現も併せ考えるならば、畿内型類似の櫛描波状文の出現はそれと連動する現象と理解することも可能である。吉田式土器成立の評価に大きな影響を与える問題であり、今後の検

充 填 文 系		省 文 系	
波状文型	羽状文型	頸 部 型	無 文 型
			

第95図 変形土器頸・胴部文様の類型と構造

討課題として提示しておく。

高坏型土器

器形は基本的に、碗形の坏部を有するもの(66・260)と、口縁端部が鐮状に水平に曲折するもの(87・354)とに分類できる。ともに栗林式からの系譜を引くもので、後続する箱清水式に継続して行く。箱清水式期に通常の坏部中位に稜をなして口縁部が外反するタイプの高坏はいまだ出現していない。内外面ともに施磨き赤彩するものが基本であるが、鐮状口縁のものは赤彩範囲が内面のみ限定される傾向が強い。脚部は中期的な短脚のものが主体だが、219・246など長脚化の兆しが認められるものも存在する。

鉢形土器

器形は高坏坏部と同様に、碗形の坏部を有するもの(65・274)と、口縁部が鐮状に水平に曲折するもの(38・235)に分類される。碗形の坏部のものは箱清水式へ継続してゆくが、栗林式からの系譜を引く鐮状口縁の類型は、基本的に吉田式の段階で消滅するものと考えられる。内外面ともに施磨き赤彩するものが基本であるが、鐮状口縁のものは高坏同様赤彩範囲が内面のみ限定される傾向が強い。

蓋形土器

今回の調査では2点を確認したにすぎない(64・373)。いずれも笠形の扁平な体部にやや長めのつまみがつくもので、つまみ部の頂部はくぼむ。体部は施磨きで仕上げられるが、詳細は不明である。

以上本遺跡出土の吉田式を構成する主要器種を中心に基礎的な検討を行ってきた。冒頭に述べたごとく、土器の出土状況から明確な一括性を把握しうる資料が少ないことより、出土資料の有する時間幅については言及を避け、各器種における時間的な推移の方向性のみを指摘するにとどめた。

笹沢 浩によって、善光寺平における後期初頭の土器型式として、吉田式土器が型式設定されて以来30年の歳月が流れた。吉田式を含めその前後の時期の資料的蓄積には近年めざましいものがあり、型式設定当時はその出現の仕方にある意味唐突な感さえあった吉田式も、現在では吉田式を介することによって、当地域における中期から後期への土器様相の推移を間断なく理解しうる状況となってきた。そうした中で、近年、吉田式という型式名の使用を避け、当地域における弥生時代後期の土器様相を箱清水様式として統一して理解しようとする研究姿勢も散見する。しかし、吉田式の名称により包括されるべき土器様相は何なのか、箱清水式とされる土器様相と何が同じで何が異なるのかといった議論を経ぬままに、型式名の統合による形だけの安易な様式の設定は、研究に混乱をもたらす以外のなにもでもない。資料的蓄積が十分なされつつある現在、型式設定時に立ち戻り、あらためてその意義について着実な議論を積み重ねる必要性が痛感される。本稿がそう言った議論の叩き台の一つとなれば幸いである。

本稿で使用した壺や甕の形態や文様の類型の設定にあたっては、青木和明に受けた教示による部分が多い。記して感謝申しあげる。

(千野)

【引用参考文献】

- 青木和明・飯島克己・若狭徹1987 「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究』4
安藤広道 1999 「『栗林式土器』の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92
笹沢 浩 1970 「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』第22巻第11号
長野県埋蔵文化財センター 1998「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・総論6」

3 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器について

今回の調査では、東北地方に分布する天王山式土器そのものと、天王山式土器の文様要素を取り入れた吉田式土器がいくつか出土している。以下これらについて若干の説明を行っておきたい。

1～5（第96図）27号住居址覆土上層より出土した天王山式土器で、接合はしないもののいずれも同一個体と考えられる。壺型土器の破片で、口縁から頸部にかけては、篋描の密な重菱形文を施文し、胴部には連繋渦文を施文している。各文様帯間の区画は沈直線文によってなされており、交互刺突文は認められない。地文としての縄文は認められず、外面は縦方向のハケ整形後施文されている。内面胴下半は、縦方向の一見ヘラケズリかと思われる強いナデ整形がなされ、胴中位以上は全体にナデ整形で仕上げられているようである。胎土も異質で明らかに搬入品と考えられる個体である。

6 16号住居址より出土した壺の胴部下半の破片で、今回の調査で出土した資料の中で、唯一附加条縄文が施文される個体であり、条は横走する。内面の調整は目の粗いハケ整形がなされ、胎土からも明らかに搬入品と考えられる個体である。

7・8 検出面から出土したもので、接合はしないが同一個体と考えられる。壺の頸部下端から胴部上半にかけての破片で、上端に交互刺突文が施文され、その下に右回りのおそらく等間隔止め簾状文が1帯、さらにその下に櫛描波状文が施文されている。摩耗のため調整等の詳細は不明であるが、在地の吉田式壺形土器の頸部文様に、交互刺突文が取り入れられたものである。交互刺突の原体は、篋状工具先端の可能性が高い。

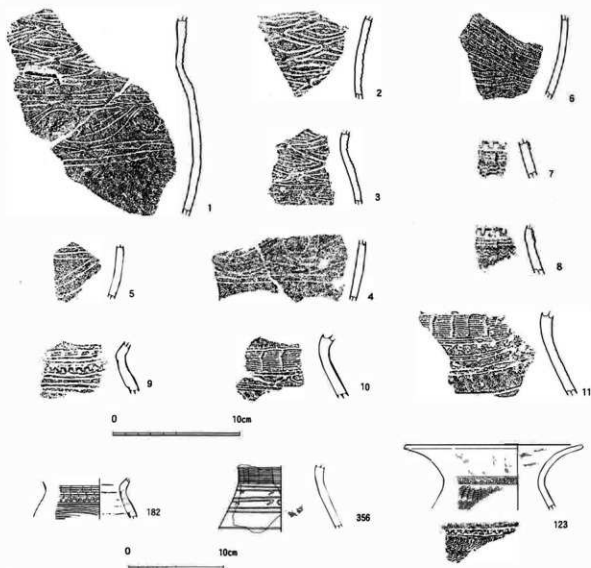
9・182 20号住居址より出土した小型の壺もしくは台付壺の頸部～胴部上半の破片で、9は182の拓影である。頸部には3本の櫛状工具による左回りの等間隔止め簾状文を2帯施文し、その下に沈線の施文はないものの、円形竹管状工具によって上方と下方から交互に刺突を行った交互刺突文が施文されている。交互刺突文以下胴部にかけては、二本一組の篋状工具による沈線が3組描かれる。この沈線がコの字重ね文になるか不明ではあるが、そうであれば第3次調査4号住居址出土の174（同報告書図34）と同一個体である可能性がきわめて高い。内面は粘土帯接合痕を顕著に残しナデ整形されるのみで、吉田式としては特異な調整である。

10・11・356 1次調査5号住居址より出土した壺の頸部から胴上部にかけての破片で、10・11は356の拓影である。頸部には右回りの等間隔止め簾状文が1帯施文される。頸部下には、二本一組の篋状工具による沈直線文が少なくとも3組認められ、二本一組のうち下の沈線の数が所を短い弧状の沈線で切ることによって工字文風に仕上げられている。外面無文部はハケ後丁寧にナデ整形され、内面胴部はハケ整形される。在地の吉田式壺の頸部下文様に、天王山式的な工字文風施文が取り入れられたものといえ、胎土・調整手法ともに吉田式の中で理解できる個体である。

123 17号住居址から出土した壺形土器口縁部破片で、口径は19.0cmを測る。頸部には二本の沈線を施文したのちに、円形の竹管状工具先端による交互刺突文が施文され、その下には櫛描波状文が2帯認められる。口縁部外面は斜～縦方向のハケ整形後強い横ナデによって仕上げられ、口縁部内面は横ハケ後軽いヘラミガキ・赤彩がなされる。頸部径が太い点や異質ともいえるが、調整・胎土ともに吉田式の範疇でとらえられるものであり、吉田式壺の頸部文様に天王山式の交互刺突文が取り入れられたものといえる。

また、天王山式土器との明確な関係は不明であるものの、関連が想定できる資料として以下のものがある。

11号住居址23（第10図）の壺形土器は、胴部中位に最大径を有し、頸部は内傾して立ち上がった後に、受け口ぎみに内湾して立ち上がる口縁部へ移行する形態を呈し、形態の上では、天王山式の影響を受けている可能性も考えられる。文様は頸部に二帯の櫛描直線文を施文し、その間に櫛描波状文を一帯施文しており、吉田式の壺の文様構成としてはやや異質ともいえる。

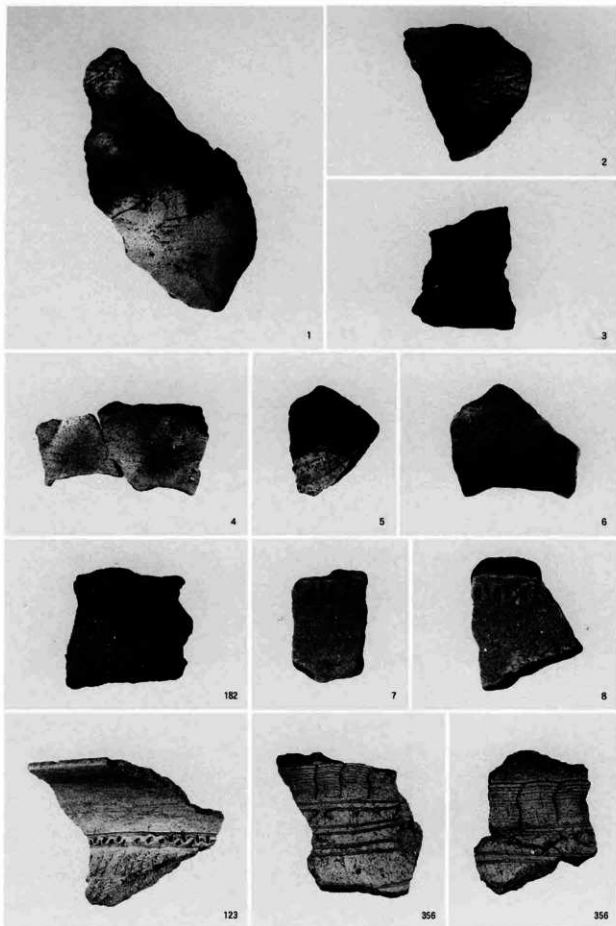


第96図 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器

11号住居址24（第10図）、25号住居址259（第64図）の甕形土器は口縁部に、頂部に寛刻みを加えた山形突起を有する。山形突起自体は在地の先行型式である栗林式や、後出の箱清水式の壺・鉢・高坏などの口縁部装飾に多用されるが、甕の口縁部に付される例は在地では類例がなく、これも天王山式の影響としよう可能性がある。

27号住居址276は（第73図）、壺形土器の頸部破片であるが、半裁竹管状工具によって右回りの連続刺突（押し引き）を2段施文した後に、櫛描波状文を2帯施文し、さらにその下に右回りの等間隔止め菱状文を2帯施している。半裁竹管による連続刺突自体は中期栗林式期にも盛行する文様であるが、在地の後期土器の文様の中には認められず、また文様構成も特異であり天王山式との関連を想定しておきたい。

搬入品と考えられる27号住居址の甕型土器（1～5）や16号住居址の甕形土器破片（6）の編年の位置またその型式的特徴について、詳述する力量は持ち合わせぬが、本遺跡は基本的に弥生時代後期前半の吉田式期の集落遺跡であり、前後する時期の遺構・遺物が存在せぬことよりすれば、これら東北系の土器群は吉田式期に併行するものと想定できる。さらに、天王山式という異系統の土器型式の文様が吉田式の中に取り入れられたと判断しうる7・8・123・182・356などの土器群は、ある程度の時間幅が考慮される天王山式系土器群の中で



も、少なくとも交互刺突文が盛行する段階と吉田式とが時間的に併行することを物語る有力な資料といえよう。

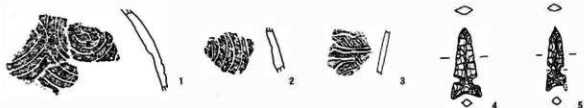
また、これら吉田式土器の中に取り入れられた天王山式土器の文様要素は、いずれも頸部文様としてのみ取り入れられたもので、あくまでもその主体は吉田式である。第5節で述べられるとおり、アメリカ式石罫に代表される東北的な石罫群の製作も、本遺跡内で行われた可能性がきわめて高い点も考慮に入れるならば、これらは、在地の吉田式土器を使用する集団の集落内に天王山式土器を使用する人々が入り込み、ある意味で共存した結果として理解することが可能であろう。

周辺に目を転じると、弥生時代中期終末に位置づけられる長野市松原遺跡SA118号住居址からは、東北南部の川原町口式の搬入品と考えられる2条同時施文による渦文を持つ壺形土器破片（第97図1・2）が出土している（長野市教委1993・石川日出志2000）。松本市竹瀝遺跡では、小破片であるものの天王山式土器が、ほぼ吉田式期に限定される集落から出土しており（3・松本市教委1996）、また中野市間山遺跡では、時間的にやや後出するものの、箱清水式古段階に相当する住居址より完形のアメリカ式石罫2点が出土している（4.5・中野市教委1992）。さらに、更埴市屋代遺跡群からも、アメリカ式石罫類似の石罫1点の出土が報じられている（長野県埋蔵文化財センター2000）。ともすれば西方にばかり目を向けがちな弥生時代中期終末～後期前半の研究動向の中で、東北系文化の南下現象が長野県域にも無関係ではあり得なかった明確な証拠であり、今後注意が必要であろう。

本稿を草するにあたって石川日出志・中村五郎両氏に種々ご教示賜った。記して感謝申しあげる。（千野）

【引用参考文献】

- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号
1998 「下老子笹川遺跡の天王山式土器」『富山県福岡町下老子笹川遺跡発掘調査報告書』
2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号
中野市教委 1992 『間山-間山遺跡緊急発掘調査報告書-Ⅱ』
長野県埋蔵文化財センター 2000 『国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 屋代遺跡群』
長野市教委 1993 『松原遺跡Ⅲ』
東日本埋蔵文化財研究会 2000 『東日本弥生時代後期の土器編年』
松本市教委 1996 『竹瀝遺跡Ⅱ』



第97図 長野県内出土 弥生時代東北系遺物

4 出土石器の様相

遺跡より出土した石製の遺物は総数1,500点である。このうち、石器の製作過程で弾き出された剥片や破片などの石屑、さらには放棄された原石や石核（残核）などを除いた資料が127点ある。これの内訳は、打製石鏃22点（「アメリカ式石鏃」7点含む）、磨製石鏃13点、打製石斧5点、刃器10点（大形5点・小形5点）、敲石2点、凹み石12点、みがき石3点、台石3点、石皿1点、太型蛤刃石斧4点、扁平片刃石斧2点、石槌4点、石錘6点、砥石15点（手持ち13点・置き2点）、加工痕ある石屑22点、環状石器1点、勾玉2点である。

(1) 原石

石器の材料となり得る質量をもった素材、すなわち原石と呼べる資料は3点出土している。原石から生み出される石器には、確そのものを素材とする一群と剥片を剥離しそれを素材とする一群があるが、ここで扱う原石素材は、すべて剥片素材に関する資料である。流紋岩材2点とチャート材1点がある。

第99図-391は多くを自然面部に覆われた流紋岩材で、原石と判断できる。表面部が部分的に剥落？しており、礫表皮の剥ぎ取りが行われた可能性もある。大きさは18.6cm、重さ3,770gを測る。

(2) 石核

原石を分割し、あるいは石核素材となる剥片を剥離準備して、そこから実際に石器製作用の剥片剥離を行った個体を石核とする。総数11点が出土している。剥片剥離は、いずれ製作されるであろう石器を意識した行為であるから、打製石斧など大形の剥片石器を製作するために準備された材質・法量をもつものと、石鏃など小形の剥片石器を製作するために用意されたものとは、予め区別して扱う必要がある。便宜的に、それを「大形剥片石器用素材」と、「小形剥片石器用素材」と仮称し提示する。「大形剥片石器用素材」と判別できる資料には、シルト質砂岩材1点があり、「小形剥片石器用素材」には流紋岩材9点、チャート材1点がある。

第100図-412は流紋岩材の剥片を素材とした例で、素材の縁辺にそって加撃を進めている。特定の打面を形成せず、剥離面を利用した打面転移が繰り返され、円盤形の残核化が観られる。実測図の正面に観察される剥離痕は、長さ3.5cm×4.2cm程度の横長剥片である。第102図-432も412同様な剥離法をとる。最終的な剥離痕は長さ2.0cm×3.9cm程度の横長剥片である。第103図-441は流紋岩材の剥片を素材とし、剥離面を巧みに利用して打面転移、剥片剥離を実行した例である。打面の転移は2回あり、いずれも90度にもふれる。実測図の正面に観察される剥離痕は長さ3.4cm×3.5cm程度の横長剥片である。

(3) 剥片・破片

剥片剥離作業の過程で弾き出された石屑のうち、石器の素材となり得る程度の大きさをもった例を剥片、それより小さな例を破片とする。「大形剥片石器」用の剥片47点・破片59点があり、「小形剥片石器」用では剥片241点、破片1,007点がある。

それらの材質別内訳は、「大形剥片石器」用の剥片では、安山岩材3点(99.8g)、シルト質砂岩材35点(691g)黒色頁岩材含む)、珪質岩材4点(46.1g)、硬砂岩材1点(6.3g)、砂岩材1点(27.1g)、ホルンフェルス材1点(18.2g)、結晶片岩材1点(4.2g)、玄武岩材1点(9.9g)があり、破片ではシルト質砂岩材40点(54.6g)黒色頁岩材含む)、硬砂岩材1点(1.0g)、珪質岩材6点(1.5g)、安山岩材1点(1.6g)、緑色凝灰岩材3点(17.0g)、ホルンフェルス材3点(0.1g)、結晶片岩材1点(3.7g)、石墨片岩材3点(1.8g)、輝緑岩材1点(2.5g)がある。

「小形剥片石器」用の剥片では、流紋岩材229点(3,481.1g)、チャート材7点(411.6g)、石英5点(77.0g)、破片では

流紋岩材760点(324.7g淡茶色3点含む)、チャート材188点(83.9g)、黒曜石材5点(0.4g)、石英43点(21.2g)、土髓11点(2.4g)がある。

またこれら石屑類とは別に、素材の両端に対向する剥離痕を留め、「挟み打ち」技術の介在を想定させる資料、所謂「楔形石器」が5点ある。流紋岩材4点(37.4g)、シルト質砂岩材1点(37.6g)である。

第99図-392は流紋岩材の剥片を素材とし、上下・左右に細かな剥離痕が認められる例。上面は素材を剥離した時点の剥離面打面が残し、剥離痕は顕著ではない。他の側面はいずれも剥離が著しく鋭利な縁面であるが、潰れはない。長さ3.2cm、重さ14.8gを測る。

(4) 打製石鏃

狩猟あるいは戦闘用と考えられる飛翔具の内、打製成形のみによって完成される石鏃は22点ある。材質別内訳は、流紋岩材20点、黒曜石材1点、チャート材1点である。形式的類別は、無基式が2点、有基式が2点、製作途中の失敗品が11点ある。基部の左右に深いU字状の挟り込みを加えた所謂「アメリカ式石鏃」は7点出土している。

第98図-378は流紋岩材の横長剥片を素材とし、側面部のみ加工を施した未完成品である。長さ5.4cm、重さ20.4gを測る大形例である。379のA・Bともに「アメリカ式石鏃」である。Aは淡い茶色をした流紋岩材で、製作は非常に丁寧に優美である。側面はほぼ直線的で、平基。挟りは細かな剥離調整により加工されている。材質そして製作技術から判断して搬入品の可能性が高い。Bは流紋岩材で、Aに比して器厚があり、挟り部位置もやや高い。やや稚拙な感を受けるが、材質的な制約であろうか？。第100図-405は、流紋岩材の横長剥片を素材とし、側面部のみ加工を施した未完成品で、長さ4.5cm、重さ8.3gを測る。第100図-407のA・Bは、ともに流紋岩材の「アメリカ式石鏃」。Aの側面はやや外湾し、挟り位置は第99図-379Bに類似し高い。Bは製作途中の失敗品であろうか、器幅が狭く、基部の作り出しも不完全である。第101図-458は流紋岩材の平基有基式である。基部を欠損しているが、挟り部の状況から判断して「アメリカ式」ではない。第102図-459は流紋岩材の「アメリカ式石鏃」で、挟り部以下の基部を欠失し、全体形が不明な例である。側面は直線的で、長身。第104図-3は流紋岩材の「アメリカ式石鏃」で、基端部を欠損する。側面はやや外湾し、第100図-407のAに似るが、基部は若干の凹基のようである。第103図-442は黒曜石材の凹基無基式で、両方の脚部を欠損する。全体を二等辺三角形に整え、挟り指数0.2以上でU字状の挟りを施す例は、当地域の弥生期に余り該当例のない形態である。第103図-443はチャート材の凹基無基式で、一方の脚部を欠損する。全体が正三角形で、幅の広い脚部と山形の挟り込み、微細な剥離調整は、やはり当地域の該期に余り例のない形態である。第103図-444は流紋岩材の剥片を素材とした両面加工の石器である。平らかな基部を呈し、大きく平坦な剥離加工を器面に施す。図示していないが、SB13-Nal77にも同様な例2点があり、「アメリカ式石鏃」関連の資料と捉え、ここでは石鏃失敗品とした。

(5) 磨製石鏃

戦闘用と考えられる飛翔具の内、打製成形、研磨仕上げによって完成される石鏃は13点ある。材質別内訳は、珪質岩材9点、結晶片岩材2点、石曇片岩材1点、シルト質砂岩材1点である。形式的類別は、すべて単孔の凹基無基式と考えられる。

第98図-380は、珪質岩材を用いた未完成品で、重量6.6gを測る。基端部の研磨はなされていないが、断面の状況から判断して、端部は「折断-折り取り」後に、研磨仕上げされるものと推察できる。基部側面には面取り

された状況が残存し、先端部側辺のみが刃部を研ぎ出している。381は結晶片岩材の凹基無蓋式で、長さ1.8cm、重さ0.4gと極小である。右側辺部に穿孔痕が認められることから、製品の欠損後に再生を施した例と判断できる。382は珪質岩C材の単孔の凹基無蓋式である。全体が五角形状で、幅は2.5cmある。第100図-404は、結晶片岩材の剥片を用い、全体を五角形状に仕上げた例で、穿孔部以下の基部を欠失する。側辺に屈折部が明瞭に研ぎ出されている。第100図-408は、珪質岩A材の未完成品で、基部大半を欠損する。側辺部は面取りされた状況にある。409は珪質岩B材で、基部端及び側辺部の研ぎ出しを完了させた段階の例である。単孔こそないが、完成品との差異はない。鏃中央には、明瞭に鑄が形成されている。410も409と同材で、同様な製作段階の例である。ただし端部は、「切断」後の面取りが顕著で、砥ぎ出されてはいない。鏃中央には、やはり明瞭に鑄が観察できる。第101図-426は、珪質岩A材の未完成品で、素材欠損後に再度の加工を施した例である。基部には本来側辺部に位置していたであろう「擦り切り」痕が明瞭に観察できる。427も426同様な材質で、素材の欠損後に再加工を施し、鏃へと成形が進んでいる。ただし両例とも、器面の研磨と側辺部の面取りの段階で製作は中断されている。428は石墨片岩材の剥片を素材とした単孔の凹基無蓋式。基部端は鋭利に研ぎ出されており、直径2mm孔の外縁には直径6mmの円形状の溝が観察でき、穿孔時の投影ライン、もしくは回転穿孔時の錐のキズであろう。第103図-445は、シルト質砂岩材の剥片を素材とした未完成品である。厚みのある素材で、成形以前の穿孔が右側辺に残る。本来の器種が何であったかは不明であるが、再加工の途中で中断された例である。446は珪質岩A材の有孔例であるが、先端及び基部端を欠失し全体形は不明である。鏃中央部の鑄の形成は、やや弱い。

(6) 打製石斧

耕作などの掘削作業を想定できる土掘り具は5点の出土がある。材質別内訳はシルト質砂岩材5点である。

第102図-435はシルト質砂岩材の縦長剥片を素材とした例で、刃部を欠損する。全体形は不明だが、残存部から推定すれば、両側辺に抉り入りの形態である。表面に自然面を大きく残し、頭部は無加工で円形。第103図-448はシルト質砂岩材で、基部を欠損するため、全体形は不明である。刃部は円刃で、刃角94度、明瞭な磨耗・線状痕が認められ、特に左側辺に顕著である。第103図-450はシルト質砂岩材の縦長剥片を素材とした例で、刃部を欠失し全体形は不明。短冊形に近い形状で、頭部は部分的に無加工で自然面が残る。451はシルト質砂岩材の短冊形を呈した例で、片面に自然面を残す。頭部と刃部ともに平面形態は円形を呈し、両方に磨耗・線状痕が明瞭に残る。刃角89度。両端部の使用は縄文時代的な用法である。452はシルト質砂岩材の縦長剥片を素材とする。側辺に若干抉れのある形態であるが、基部大半を欠損し、全体形は不明である。刃部には磨耗・線状痕が顕著で、刃角は106度を測る。

(7) 敲石、凹み石

する・たたく・つぶす等の機能を担った道具には、する用法を優先させた磨石と、たたく用法を優先させた敲石がある。本遺跡では磨石の出土はなく、敲石2点がある。さらに凹み部が皿状を呈し、すり・つぶす用法を主体とした凹み石12点が出土している。それぞれの材質的な内訳は、敲石で硬砂岩材1点、花崗岩材1点、凹み石はすべて安山岩材である。

第98図-388は輝石安山岩材の円礫を素材とした凹み石で、表面に直径5.0cmの「すり鉢状」の凹部がある。重さは712gと軽量であるが、固定式であろう。389は安山岩材の礫を素材とした凹み石で、表裏両面に直径6.0cm程度の「すり鉢状」の凹みがある。重さ1,537gを量る。390も安山岩材の礫を用いた凹み石で、5,081gある。「すり鉢状」の凹みは表面に1つだけ存在する。第99図-396は枕状を呈した安山岩の礫を用いた凹み石で、凹部の直径

は2.9cmと小さ目である。重さ3,709gを量る。第100図-403は安山岩材で、重さ3,319gを量る礫を素材とする。凹部は直径6.2cmの「すり鉢状」で、表面には「アバタ状」の敲打痕も存在する。第100図-418は安山岩材の礫を用いた凹み石で、全体の2/3程度を欠失する。凹部は「アバタ状」の敲打痕に近く、「すり鉢状」ではない点、狭義には本器種とは別類とすべき例である。第101図-424は、花崗岩材で、礫素材の周辺部を敲打使用した所謂「球状ハンマー」で、重さは484.1gを量る。敲打部の痕跡は、たたく・するの兼用が観られる。425は安山岩材の礫素材で、表裏面に直径5.5cm程度の「すり鉢状」の凹みがある。本例は上下両端に敲打痕があり、敲打としての機能も存在していたと考えられる。429は安山岩材の礫を素材とした凹み石で、表面に直径7.8cmを測る凹みがあり、裏面には「アバタ状」の敲打痕が観られる。403例と同様な形状である。430は枕状の安山岩材を用いた凹み石で、表面に直径5.8cmの凹みがある。396例と類似した形状で重さ2,729gを量る。第104図-455は安山岩材の礫を素材とした凹み石で、重量1,767g。表面にのみ直径6.2cmの凹みが観られる。第102図-440は硬砂岩材の敲打具で、下端及び側面、裏面に敲打痕が認められる。上端部欠損の後、欠損部もさらに敲打使用し、槌様を呈する。

8) 台石

対象物をすり・つぶす等の機能を担い、特に地面などに固定して用いる道具には、台石・石皿がある。台石3点、石皿1点があり、材質はすべて安山岩材である。

第99図-395は安山岩材の礫を素材とした台石であるが、大部分を欠損する。残存部表面には明瞭な磨耗痕が観られる。第102図-437は安山岩材で、表面に皿部の形成される石皿である。3/4を欠失する。第104図-456は板状の輝石安山岩材を素材とした台石で、周辺部を欠損する。機能部は表面のみで、明瞭な磨耗痕が認められる。457も板状の輝石安山岩材を用いた台石で、表面には顕著な磨耗面が観察できる。1/2を欠失する。

9) 刃器

鋭利な刃部を有し、対象物の切断、削り等の作業を担った刃のある石器は10点ある。「大形剥片」素材の刃器は5点あり、シルト質砂岩材4点、ホルンフェルス材1点である。「小形剥片」素材の刃器は、すべて流紋岩材で5点である。

第100図-415は点斑のあるシルト質砂岩材の縦長剥片を素材とし、全周を加工し方形状に整えた例で、長さ6.7cmを測る。想定される刃部に使用痕は確認できない。本個体の器種の認定は難しく、法量等を含めた技術形式的視点から「大形刃器」の範疇で括ったが、この点を留意して扱うべきであろう。第102図-438は流紋岩材の縦長剥片を素材とし、一方の側辺を加工して背部形成した例である。刃部は外湾し、刃角49度を測る。刃部には輝くまだら状の磨耗・光沢痕が観察できる。

10) 石錘

対象物の穿孔を主目的とした錘は6点ある。シルト質砂岩材2点と流紋岩材4点である。形態的には2種類があり、素材剥片の二つの側辺のみを加工して機能部とする例と、素材の全周を加工して紡錘形に仕上げた例である。

第98図-384はシルト質砂岩材の縦長剥片を素材とし、長さ二つの側辺を加工して機能部を作出した例。素材剥片の剥離面打面は無加工で残る。使用痕跡は確認できない。第100図-413はシルト質砂岩材を素材とし、二つの側辺を加工して刃部とした例。刃部には肉眼で確認できる程度に明瞭な回転痕がある。414は流紋岩材で、や

はり二側辺部を加工して機能部を作出した例。機能部としての刃部は大半を欠失する。第102図-433は流紋岩材を用い、二つの側辺部を刃部とした例で、頭部を欠損する。刃部には肉眼でそれと判る磨耗痕が認められる。第103図-447は流紋岩材で、素材の全周を加工し、全体形を「紡錘状」に仕上げた例。機能部先端を僅かに欠損し、使用痕は認められない。

Ⅲ 磨製石斧

樹木の切り倒し、木々や骨角材の切断・加工などを司る道具には、大型蛤刃石斧4点と扁平片刃石斧2点がある。蛤刃石斧の材質は変質輝緑岩材3点、変質玄武岩材1点で、片刃石斧のそれは、変質輝緑岩材1点と変質玄武岩材1点である。

第99図-399は変質玄武岩材の片刃石斧で、長さ7.3cm、重さ70.8gを測る。全体形は台形様で、刃部平面形は、直刃よりやや張り出す形態である。刃角55度、明瞭な磨耗そして線状痕を確認できる。第99図-400は変質玄武岩材で、長さ10.3cm、重さ259.5gを測る小形の蛤刃石斧。全体形は蛤台形様を呈し、頭部は平坦で敲打痕が残る。刃部は直刃に近い緩いカーブの円刃で、刃角74度、明瞭な磨耗・線状痕が観察できる。第101図-419は変質玄武岩材（「緑簾石-ブレイナイト岩」）で、長さ7.7cm、重さ72.1gを測る片刃石斧である。全体形は長方形に整えられている。刃部は使用による損傷著しく、表面の剥落、磨耗・線状痕が顕著である。第101図-420は変質輝緑岩材で、刃部幅7.1cmを測る太形蛤刃例であるが、基部大半を欠失し、全体形は不明である。刃角73度で、磨耗・線状痕が認められる。第102図-439は変質輝緑岩材の蛤刃石斧刃部破片である。第104図-454は変質輝緑岩材の蛤刃石斧である。刃部幅6.2cmを測る中形例であるが、長さ12.2cm程度の大きさに再加工している。再加工の敲打痕は顕著に残るが、それ以降の研磨は認められない。刃角74度、磨耗・線状痕が観察できる。

Ⅳ 石槌

対象物のすり潰しを目的とし、ここでは特にベンガラ生成を主目的とした粉砕・加工具である。すべて蛤刃石斧の転用例で変質輝緑岩材4点の出土がある。

第100図-401は変質輝緑岩材の中形斧または大形斧の基部を転用した例で頭部を欠損する。機能部は顕著に磨耗し、鏡面状を呈する。第100図-411は変質輝緑岩材の大形斧の基部を転用した例で、被熱あり。機能部は鏡面状を呈する。第101図-421は変質輝緑岩材で、中形斧の刃部を転用した例である。機能部は僅かに磨耗する。第103図-453は変質輝緑岩材の蛤刃石斧未製品（中形斧）を転用した例である。頭部よりの基部残存例で、全面に敲打整形痕がある。欠損面に僅かながら部分的な磨耗が看取できることから、本器種に含めた。

Ⅴ みがき石

対象物を研磨する道具で、特に土器の製作等に関わったと考えられる河原石が3点ある。材質別内訳は、安山岩材1点、珪質頁岩材1点、シルト質砂岩材1点である。

第99図-398は、珪質頁岩材の楕円形礫を用いた例で、全面に細かな線状痕を伴う。重さ67.3gを量る。第101図-422は安山岩材の棒状礫を用い、端部を中心に器表裏面を使用した例で重さ70.8gを量る。第101図-423はシルト質砂岩材の棒状礫を用いた例で、全面に磨耗が認められる。また端部に敲打痕が観察できることから、「タガネ状」の敲き具としての用法も加わったと考えられる。

00 砥石

対象物を研磨する作業を担った砥石は15点ある。用法には、軽量で手に保持して使用する手持ち砥石と固定して使用する置き砥石の2者があり、それらの材質別内訳は手持ち砥で砂岩材12点、珪質岩材1点、置き砥で閃緑岩材2点である。

第98図-386は花崗岩質砂岩の剥片を素材とした手持ち砥。1/2程度欠損するが、全体形は方形状と推定できる。機能部は表裏面及び全側面部にわたる。387は細粒砂岩材の剥片を素材とした手持ち砥で、1/3程度欠損する。長方形状を呈すると考えられ、表裏及び全側面部に機能部がある。第99図-393は珪質岩材で、全体を長方形状に仕上げた例。機能部は全面にあり、特に表面は2つの砥面で構成されている。完形例。394は花崗閃緑岩材の扁平礫を素材とした置き砥石と看られるが、大半を欠失しているため全体形は不明である。残存部分に観察できる砥面は、幅3.5cmほどの溝状の凹みの集合である。第100図-402は細粒砂岩材の手持ち砥で、1/3程度欠失する。全体形は使用により「糸巻き状」を呈する。表裏面には面状砥面のほか溝状の砥面が存在する。406は凝灰岩材の手持ち砥で、2/3近くを欠失する。機能部は全面にわたり、特に表面の使用は堅著である。416は細粒砂岩材の剥片を素材とした方形状の手持ち砥であるが、1/4程度欠損する。機能部は全面に及ぶと考えられ、いずれも面状砥面である。S B 23出土の砥石（取り上げNo148）と同一個体と考えられる。417は細粒砂岩材の砥石であるが、大部分を欠失するため、全体形は不明である。置き砥の可能性も想定できる。第101図-431は閃緑岩材の礫をそのまま使用した置き砥石。表面には砥面と考えられる磨耗面を観察できる。重さ1.476gを量る。第102図-434は凝灰岩質砂岩材の剥片を素材とし、全体を方形状に仕上げた手持ち砥である。機能部は全面にあり、いずれも面状砥面である。1/2欠損例。436は細粒砂岩材の手持ち砥で、1/2程度欠損するが、全体形は「糸巻き状」を呈すると考えられる。第103図-449は細粒砂岩材の剥片を素材とした手持ち砥で、1/3を欠失する。「糸巻き状」の胴部破片と推定できる。

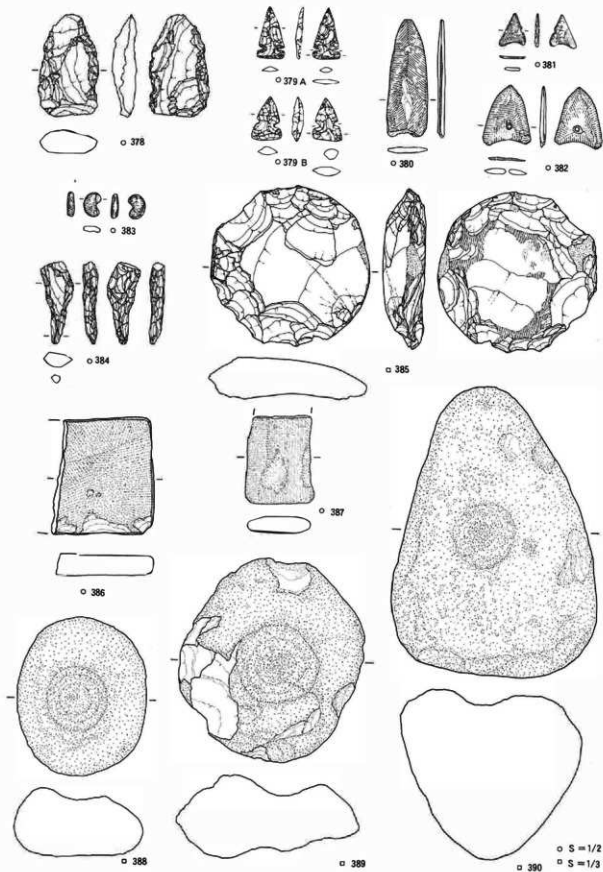
03 環状石器

第98図-385はシルト質砂岩材の剥片を素材とし、全体を円盤状に剥離成形し、研磨により仕上げた資料である。穿孔はなく、製作途中の失敗品と考えられ、長さ12.6cm、重さ565.6gを測る大形例。

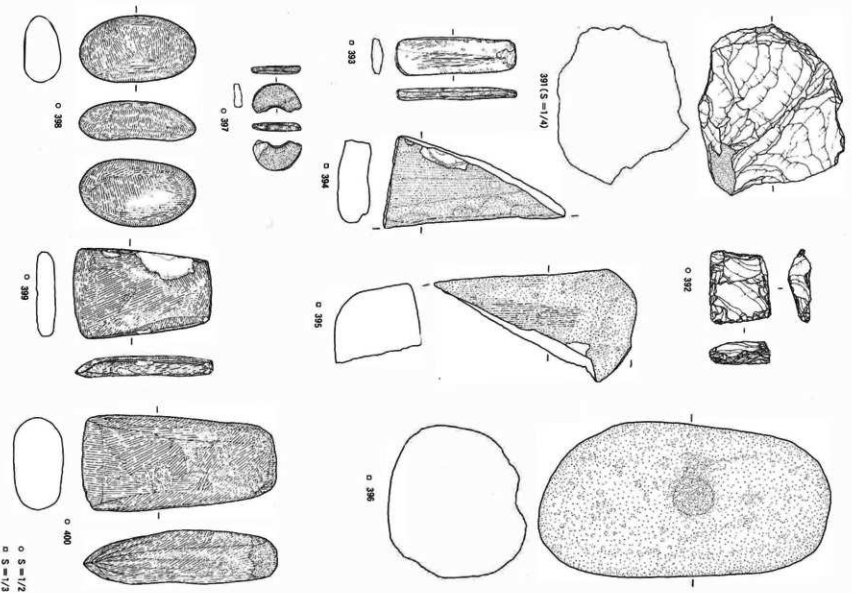
04 勾玉

垂飾品と考えられる勾玉が2点ある。

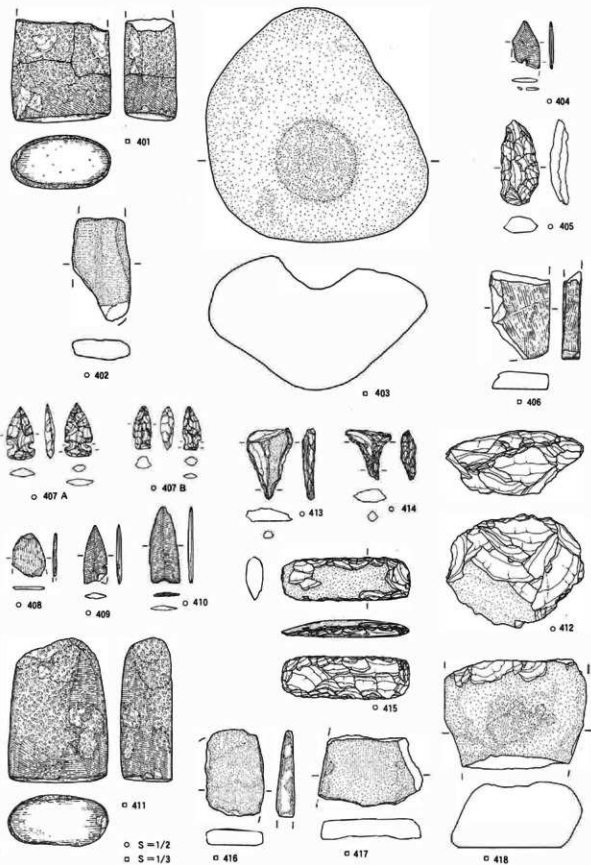
第98図-383は翡翠材の未完成品で、片面に穿孔途中の痕跡が残る。所謂「半球状勾玉」に類似するが端面の面取りはなされていない。長さ1.25cm、重さ0.7gと小振りである。第99図-397は蛇紋岩材の勾玉未完成品である。端部を欠損するが、「半球状勾玉」に近い形状である。（町田）



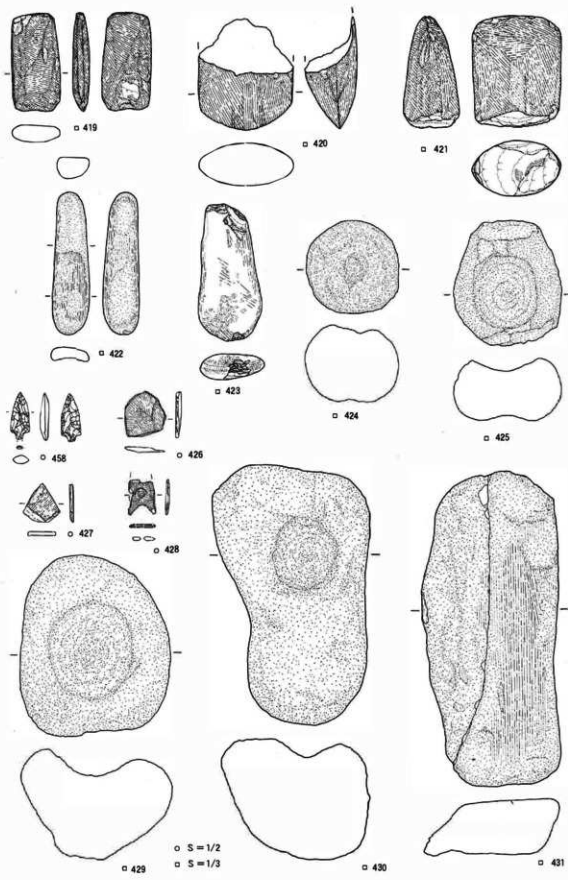
第98团 出土石器实测图① (S B 11 : 378~390)



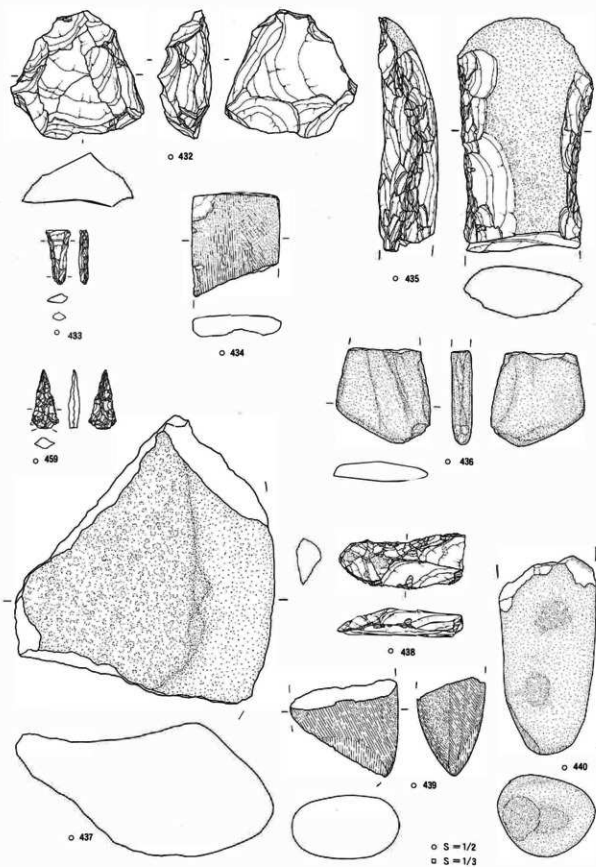
第99回 出土石器実測図② (S B 13 : 391~396、S B 16 : 397~400)



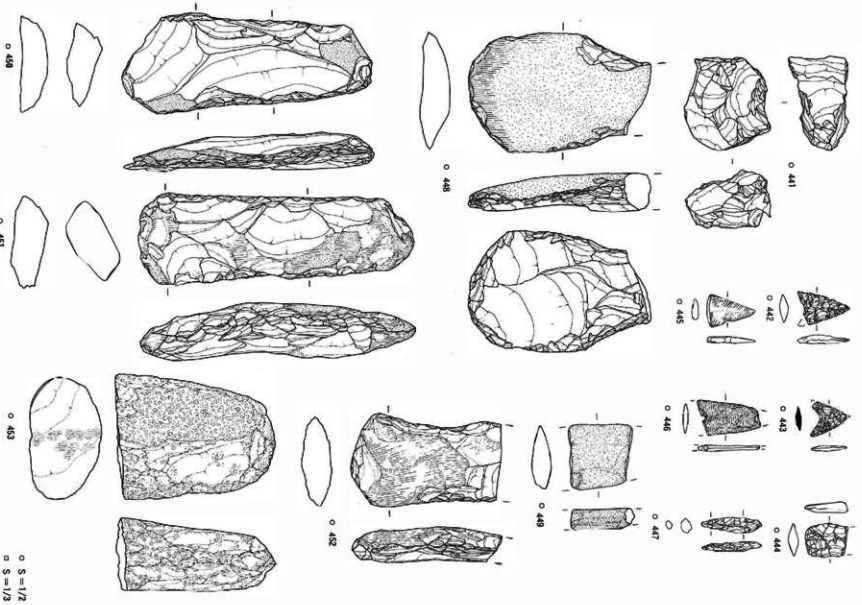
第100图 出上石器实测图③ (S B17: 401~403, S B18: 404, S B19: 405~406, S B20: 407~411, S B22: 412~418)



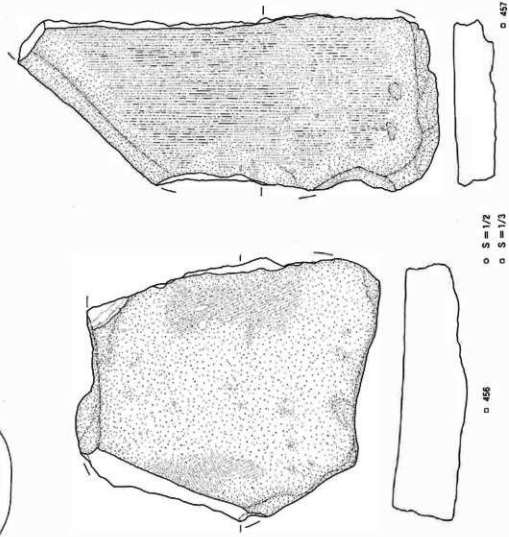
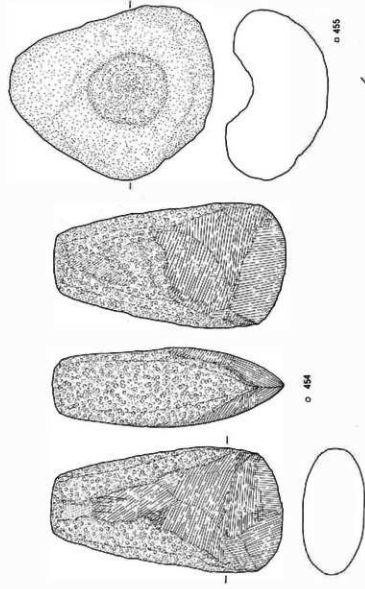
第101图 出土石器实测图④ (S B23: 419~425, S B24: 426~431.458)



第102图 出土石器实测图⑤ (S B 25 : 432~434, S B 26 : 435~436, S B 27 : 437, 459, S B 28 : 438~440)



第103圖 出土石器実測圖⑥ (遺跡外: 441~453)



第104图 出土石器类图② (遺構外: 454~457)

5 長野吉田高校グランド遺跡から出土した「アメリカ式石鏃」関連資料の検討

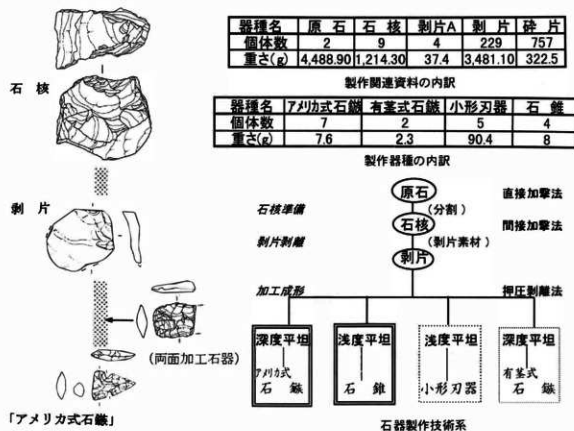
長野吉田高校遺跡は、所謂「アメリカ式石鏃」〔註1〕を出土し、その製作関連資料を確認できた点に於いて特筆できる遺跡である。「アメリカ式石鏃」の調査例は、県内に限れば中野市間山遺跡（榎原1992）のみであり、全国的に見ても、長野市の出土は最も内陸部での確認例にあたる〔註2〕。本遺跡で発見された「アメリカ式石鏃」は、すべて流紋岩材〔註3〕であり、同時に収集された流紋岩材の石屑が、その製作関連資料であることは調査時より予想されていた。整理の結果、流紋岩材を使用した器種には、「アメリカ式石鏃」7点、有基式石鏃2点、石鏃関連の失敗例11点、石鏃4点、小形刃器5点があり、「アメリカ式石鏃」が製作の中心的存在であることは首肯できた。したがって流紋岩材の石屑全体を扱うことで、「アメリカ式石鏃」を捉えてみようというのが、本稿の目的である。

「アメリカ式石鏃」を取り巻く製作技術系

流紋岩材を使用した剥片剥離技術には、以下の特徴がある。

原石は、原礫面に覆われた重量ある大きな素材を用意する。残存資料では718.9g例（SB11-No45）〔註4〕と3,770g例（第99図-391）の2点があり、およそソフトボール大からハンドボール程度の大きさに比定できる。

石核の準備は、原石の原礫面を除去することから始まる。その後、原石を分割し、石核用素材として厚みのある剥片を剥離することによって完了する（SB13-No 9 接合資料）。この時、石核には平坦な剥片剥離用打面が明瞭に形成されていることが条件のようで、素材となる剥片が分割面によって四角柱状を呈することも、ままある。事実、残存資料には非常に平坦で確固とした剥片剥離用打面を観察できる（第100図-412や第103図-441）。9点の出土がある。



第105図 流紋岩材の石器製作系

剥片剥離は、その平坦にして明瞭な打面を間接的に加撃することによって実行される。打面には直径3mm程のパンチ痕が観察できることから、間接打撃法の介在を想定することができる。剥片剥離の進行に伴う打点の移動は、狭い範囲を走行後退するものなので、作業面は特定箇所が剥離痕によって深く抉れる状況を示す。また打面の転移は90度にふれる例が6割を占め、素材の側面に形成された分割面、あるいは新たに素材を分割することによって生成された平坦面を転移面となす。この点に於いても、打面の選択ないしはその周到な準備が看取されるのであり、決して任意に選択した箇所を加撃するものではない。

「素材剥片」の生成は、石核の準備段階及び剥片剥離の段階で実現される。石核の準備段階では、核となる素材の剥離行為に伴って長さ5.0cmを超えるような大きな剥片も生みだされる。石核からの剥片剥離段階では、長さ4.0cm未満程度の横長剥片を主に作出し、石錐製作を根幹とする器種製作用素材の準備がなされる。狭義に「素材(用)剥片」とは、器種と呼べる石器の製作用剥片、すなわち目的なる剥片を指すものであり、剥片全体の中で、それは区別すべき類である。ここでは、剥片全体を次ぎのように区分・仮称し、整理する。

剥片1種…原石時の表面、すなわち自然面または節理面が剥片に1/2以上観察できる例。31点の出土がある。

剥片2種…自然面が認められないか、存在しても1/2に満たない程度で、原石の表面を想定できない例。

95点の出土がある。

剥片B類…剥片1種及び2種に区別された剥片の中で、「素材(用)剥片」となり得る属性を担った剥片。

103点の出土がある。

剥片A類…剥片に挟み打ちの痕跡、所謂「両極剥離痕跡」が認められる例。4点の出土がある。

これらの類別は、剥片A類・剥片B類・剥片1種・剥片2種の準に優先タクソンとする。また剥片とは別に、剥片剥離作業及び製作作業に伴って弾き出された石屑を砕片とし、757点(淡茶色3点除く)の出土がある。

石器の製作は、剥片B類を剥離加工することによって行われる。残存器種の内訳は第105図に示すとおりで、剥片剥離行為の中心に石錐製作が位置付くようである。しかも製作途中の失敗例を除く製品数の比では、「アメリカ式石錐」が優位であり、それを根幹とした製作行為が暗示される。

「アメリカ式石錐」は剥片B類を素材とし、周辺部より押圧剥離を施すことによって完成される。押圧剥離は剥離角が緩やかで平坦な成形加工をとり、器体の中心部まで行き届く深度の加工である。剥離加工に規則的な手順を読み取ることにはできないが、第105図のような両面加工石器を製品化の工程に介在させることが可能であれば、2回の成形段階を踏むことになる。基部にある左右の挟り込みは、最終的な成形加工に位置付けられる。

有茎式石錐も押圧剥離加工によって仕上げられる。2点のみ出土しているが、いずれも基部欠損例で、「アメリカ式石錐」との判別基準を問われる。基部幅に対する狭い基部幅、そして狭い機能部幅などに基準を置いたが、全体形状に違いの認められることも事実である。平坦な成形加工をとるが、「アメリカ式石錐」が幅広い剥離痕をもつに対して、幅が狭く細かい剥離痕をもつという特徴がある。

石錐は、剥片の長い二側面に剥離加工を施し、頭部無加工で完成される。頭部は素材剥片剥離時の打面であり、その痕跡を明瞭に残す。剥離加工はやや急斜度な押圧剥離で、錐部を除き器体中心部までは及ばない。錐機能部は幅が5mm以内で棒状を呈し、他器種とは明らかに峻別できる。

小形刃器は、剥片の一個辺部を加工して仕上げられる。剥離加工には刃部形成と、背部形成の2者があり、ともに急斜度な押圧剥離による。石錐の失敗例とした中には、二側面を加工した刃器様の個体2例(第98図-378、第100図-405)があり、小形刃器との判別基準が問われる。平坦な両面加工が二側面にわたる点を重視し、別器種に包括させたが、再考を要すべき資料である。

	代表値				散布度				標本数	
	平均値	中央値	最大値	最小値	分散	標準偏差	尖度	歪度		範囲
最大長(mm)	5.65	5.45	8.6	4.1	2.09	1.45	1.65	1.22	1.65	6
最大幅(mm)	6.4	6	10.2	4.2	3.3	1.82	2.51	1.34	1.7	6
最大厚(mm)	3.09	2.9	5	1.8	0.82	0.91	1.97	0.99	0.8	9
最大重(g)	153.17	91.9	541.6	54.1	30214.84	173.82	6.37	2.5	78.2	7
剥離角(度)	84.33	82	115	66	236.75	15.39	0.66	0.9	21	9

石核の基礎統計量

	代表値				散布度				標本数	
	平均値	中央値	最大値	最小値	分散	標準偏差	尖度	歪度		範囲
最大長(mm)	4.25	3.4	9	2.1	3.91	1.98	0.64	1.15	2.6	25
最大幅(mm)	4.44	3.6	10.2	1.7	4.51	2.12	1.66	1.28	2.6	29
最大厚(mm)	1.49	1.3	4.5	0.3	0.72	0.85	3.84	1.51	1.1	31
最大重(g)	31.57	9.5	177.6	1.8	1652.16	40.65	6.09	2.25	40	25
剥離角(度)	96.83	94.5	110	88	49.79	7.06	-0.85	0.61	12	12

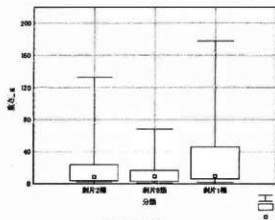
剥片1種の基礎統計量

	代表値				散布度				標本数	
	平均値	中央値	最大値	最小値	分散	標準偏差	尖度	歪度		範囲
最大長(mm)	3.59	3.35	9	1.5	1.8	1.34	3.88	1.49	1.45	56
最大幅(mm)	3.35	3	6.8	1.3	1.72	1.31	-0.05	0.67	1.6	71
最大厚(mm)	1.26	1.1	3.2	0.3	0.32	0.56	1.48	1.06	0.8	92
最大重(g)	18.68	8.6	132.8	2.2	598.75	24.43	10.9	2.97	19.9	45
剥離角(度)	107.73	106	150	85	279.49	16.72	2.01	1.49	14	40

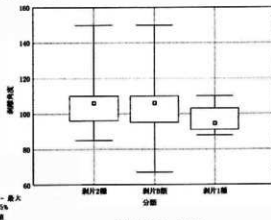
剥片2種の基礎統計量

	代表値				散布度				標本数	
	平均値	中央値	最大値	最小値	分散	標準偏差	尖度	歪度		範囲
最大長(mm)	3.48	3.35	7.2	1.5	1.77	1.33	-0.01	0.87	2.2	76
最大幅(mm)	3.61	3.4	7.8	1.5	1.7	1.31	0.34	0.79	1.95	92
最大厚(mm)	0.87	0.8	2.2	0.3	0.16	0.4	1.94	1.04	0.4	104
最大重(g)	13.41	9.3	68.2	1.2	215.93	14.7	5.03	2.16	13.8	71
剥離角(度)	103.7	106	150	67	181.88	12.72	2.64	0.02	15	67

剥片B類の基礎統計量

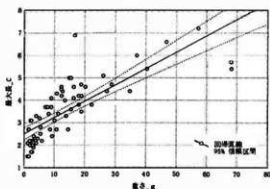


重さの比較

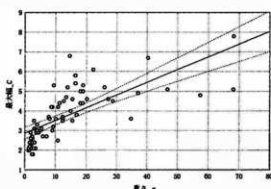


剥離角度の比較

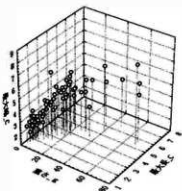
第106図 剥片類の基礎統計量(流紋岩材)



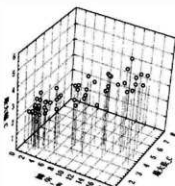
長さとの重さの相関 (全体)



幅との重さの相関 (全体)



長さ・幅・重さの相関 (全体)

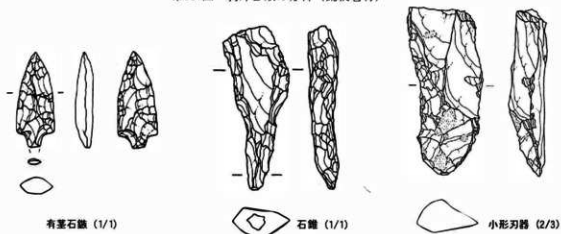


長さ・幅・重さの相関 (20g未満)

	代表値				散布度					標本数
	平均値	中央値	最大値	最小値	分散	標準偏差	尖度	歪度	範囲	
最大長(mm)	3.11	2.95	6.9	1.5	1.22	1.11	0.79	0.81	1.8	58
最大幅(mm)	3.43	3.15	6.8	1.6	1.32	1.15	-0.03	0.7	1.7	58
最大厚(mm)	0.8	0.8	1.4	0.3	0.08	0.28	-0.86	0.12	0.5	59
最大重(g)	8.06	7.1	18.9	1.2	33.78	5.81	-1.19	0.46	10.2	59
剥離角(度)	102.74	106	150	67	198.64	14.09	2.96	0.08	14	42

剥片B類 (20g未満) の基礎統計量

第107図 剥片B類の分析 (流紋岩材)



第108図 流紋岩材から製作された器種

《基礎分析》

原石は2点のみであり、統計的操作の対象にない。2例の主要4法量は、6.2cm×11.2cm×6.3cm、718.9g (SB11-No45) と、14.1cm×18.6cm×17.1cm、3,770g (SB13-No181) である。

石核全体の基礎統計量は第106図に示す。重量の分散が著しく、ヒストグラムからは2峰性の分布が読み取れる。重さ541.8gを量る離れ値1点(SB12-No83)が存在しており、これを除いた平均値を算出すると5.3cm×5.9cm×2.9cm、88.4gとなる。おおよそ原石の1/10程度の重量であることが理解される。

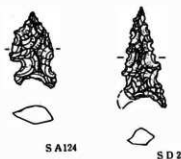
剥片1種全体の基礎統計量は第106図に示す。これには石核の準備段階及び剥片剥離段階の資料が含まれており、重量の分散がやはり大きい。ヒストグラムからは20g未満、20g以上100g未満、それ以上の3群が予想でき、長さ・幅の値は概ね4.0cm、8.0cmを境界とする。

剥片2種の基礎統計量は第106図に示す。これにも1種同様、石核の準備段階及び剥片剥離段階の資料が含まれており、重さに20g未満、20g以上100g未満、それ以上の3群が予想できる。1種・2種ともに剥片B類に比して厚さが平均値で5mmほど大きい。

剥片B類の基礎統計量は第106図に示す。本類は剥片1種及び2種より抽出された目的的な素材剥片であり、分散はそれらに比して小さな値である。重さのヒストグラムは、歪み度2.16、尖り度5.03を示す右に裾引く形状で、20g内に75%が含まれる。重さ1.0g前後の石鏃、2.0g程度の石鏃、10g前後の小形刃器を製作する剥片は、恐らく20g未満の一群に含まれるものと予想されるから、そこを境界値として区分し基礎統計量を別に算出する(第107図)。平均値は3.11cm×3.43cm×0.8cm、8.06gとなる。実際には6.0g前後をさらなる境界値として、石鏃・石鏃の一群と、小形刃器の一群の素材とが区別されるものと思われるが、両面加工石器の位置付けもあり、ここでは第107図に長さ・幅・厚さの3次元散布図を示し課題としておく。

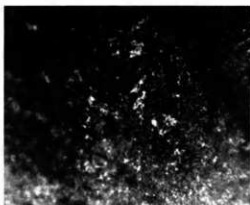
「アメリカ式石鏃」の形態と機能

「アメリカ式石鏃」の形態的特徴は、「底部に近い所に於て左右相対した切り込みを具えて居る」(坪井1908)ことであり、それがまるで「逆T字形の柄」(P12, 江坂1962)に見えることである。この点に於いて、有茎式



長野市松原遺跡Ⅲ

第109図 「アメリカ式石鏃」類似例

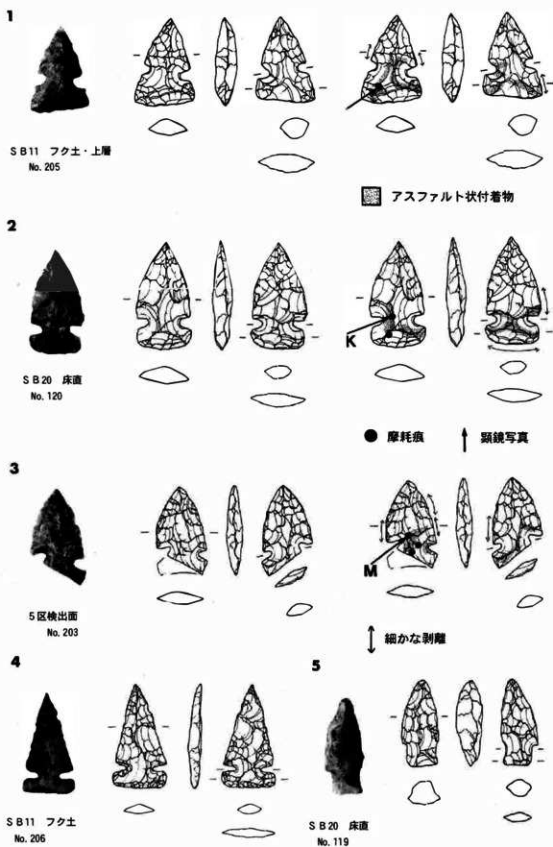


基部の摩耗痕 (×200) (K)



アスファルト状付着物 (×100) (M)

第110図 「アメリカ式石鏃」の摩耗痕及び付着物



第111図 長野吉田高校グラウンド遺跡出土の「アメリカ式石鏃」(S=1/1)

鐵とは外觀的に区別される。吉田高校遺跡で発見された「アメリカ式石鐵」にも、明瞭且つ整然としたU字状の「切り込み」が観察され、型式理解は容易である。すべて7点の出土があり、全体形の推定できる個体は5点ある。それらの形態が、みな違う点の特筆すべきであり、坂本氏の論文にあるように「一遺跡にいくつかのタイプが混在する状況」(P224, 坂本1995)そのものである。幸運にも本出土例は、後期初頭に位置付けられる所謂「吉田式」期単純遺跡であり、SB11から2点、SB20から2点、SB27から1点と住居内出土例が中心を占める。しかも製作関連資料が共存しているのだから、製作時に数種の形態を生成していたと看するのが自然である。このことが坂本氏の想定する「アメリカ式石鐵を製作する場合小さな形態の違いは度外視していた」(P224)ことのように思わないが、形態が時期と地域、集団の違いを抜きに、よりミクロな作り手の世界で具体化されていたことは事実である。この形態的差異が広義に型式を表象したものであるならば、形態作出の背景に、「アメリカ式石鐵」の用途を推論する糸口がある。数種の形態が共存する様は、「アメリカ式石鐵の形態セット」のようでもある。空想は兎もかく、現況の研究レベルで、この形態的差異を説明することは残念ながらできない。ところで長野県内の弥生時代中期後半には、「アメリカ式石鐵」類似の資料がある。鐵身の二側面の下部に相対した括りを施すもので、在地の型的伝統にない個体である。無茎式例が4遺跡、有茎式例が2遺跡ある(P82, 83, 町田1999)。これらの資料が、巷で取り沙汰される岡山県百間川遺跡例のような「五角形鐵」あるいは「将棋の駒形鐵」などと呼ばれる型式群とは、系統的に異質であることは所属時期、分布地域の違いをもって歴然としている。石鐵の材質、括りの位置、全体形状といった要素を鑑みれば、「アメリカ式石鐵」との関連をまずは問うべきである。少なくとも第109図に示した松原遺跡出土例(久保1993)のような個体が、偶発的理由によってではなしに出現してくる背景には、「アメリカ式石鐵」の存在を予想するのが妥当である。いみじくも古川・石原両氏が引用した「三角形の底辺に近いところを、両側から深く欠きとって」(P28, 小林1959)製作されることこそが、まさに「アメリカ式石鐵」の最大の特徴であり定義である。とすれば、第109図に観察できる「深い欠きとり」こそ、それが正に「アメリカ式」である証左といえる。凹基無茎にして相対するU字形の括りを施すことで形態の成立を図る。この作業のみでも外來的要素の読解は十分である。ただし在地石材を使い、通常の石鐵と同様な細かい押し剥離法によって仕上げられている点で、後期段階の本遺跡例とは決定的な違いがある。中期後半での「アメリカ式石鐵」登場の背景には、作り手の本質を問うことはできないのである。

次に「アメリカ式石鐵」の機能・用途を考えるにあたり、第111図に全体形を推定できる5点を実大で再掲した。各個体の法量・属性についての詳細は観察表に譲るが、有茎式鐵との特徴的差異は読み取れない。機能的な部分に於いて有茎式鐵と区別できないのであれば、「飛翔・殺傷用の道具」を否定する根拠はないことになる。顕微鏡観察(×200)の結果では、先端部に明瞭な使用痕跡は認められなかった。基部に関しては装着に由来するものであろうか、剥離後線に磨耗痕跡を観察できた(第111図、●印)。また基部の括り込み部の周辺にはアスファルト状の付着物が3例に確認できた(第111図、スクリーン・トーン)〔註5〕。アスファルト状の付着物(第110図)は極微量であり、物質の化学的分析を経っていないが、アスファルトであれば弥生時代の県内資料には、余り例のない付着物である(P205, 町田2000)。付着位置から推察して、鐵身を矢柄へ装着する際の膠着材と考えるのが妥当で、柄の存在を予想することが可能となる。緊縛法の推定までは難しいが、第111図に示すとおり、U字形に括るその部分には付着物は確認できない。

ここで注意すべきは第111図-4(SB11-No206)の資料である。この個体は、今回の出土資料中、最も精製で優美である。材質も流紋岩材と判定されたが、外觀は淡い茶色で硬質な頁岩に似て、白色を呈した他資料とは一見して区別できる。流紋岩の母岩中に点在する類似部分を素材としたとも考えられるが、水洗選別資料を含めても同様な色調を呈した石罫は破片が3点出土しているだけである。このことは、この個体が流紋岩材であった

にせよ、本遺跡内で製作されなかった可能性を示唆するものである。顕微鏡観察の結果でも、磨耗痕跡や付着物は認められない。同じ住居内から伴出したNo205を始めとする他6点との対比は、何を意味するものであろうか。No206を搬入品と考えれば、本遺跡地での「アメリカ式石鐮」製作行為の影に1点のモデル?が存在していたことになる。

小 結

長野吉田高校遺跡出土の「アメリカ式石鐮」製作に関する特徴

○遺跡周辺部には産出しない流紋岩材を選択する。原材料は表皮のある円礫であり、ハンドボール程の大きさのものを分割し、剥片状の素材を剥離して石核を準備する。石核には明瞭な剥離面打面を有することが特徴で、剥片剥離は常に分割面を打面とする点で、規則的な加撃・剥離行為である。

○素材(用)剥片は、20g未満程度の剥片を選択し、押圧剥離法によって器種を生成する。

○剥片の全体を大まかに加工成形し、4.0cm～5.0cmほどの両面加工石器を製作する。次ぎにより細かな平坦剥離で、石鐮形に全体を整形し、基部に深いU字状の抉りをして「アメリカ式石鐮」を完成する。したがって「アメリカ式石鐮」の表裏面に観察される剥離痕は、有茎式石鐮に比して幅広く粗い感じを受ける。

○遺跡内には1点のみ優美にして精製な個体があり、「アメリカ式」としての大別上の規範形が存在した可能性がある。ただし細別形態には幾つかの種類があり、資料の共伴性を考慮すれば、それらを「アメリカ式石鐮の形態セット」と理解することもできる。

○法量等の属性に有茎式石鐮との大きな差異はなく、石鐮としての機能は備わっている。県内では産出しないアスファルト?状の膠着物があり、柄の存在を予想できる。完形資料が多く、欠損率は少ない。

註1. 坪井正五郎1908「陸前名取地方に於ける見聞」東京人類学会雑誌第11巻120号

坂本和也1995「アメリカ式石鐮考」『みちのく発掘 一菅原文也先生還暦記念論集一』

2. 古川知明・石原正敏1986「付編3 アメリカ式石鐮に関する一考察」『六地山遺跡』新潟市教育委員会

3. 長野市立茶臼山自然史館学芸員、畠山氏の鑑定による。

4. 文中で使用する(SB○No○)とは実測図面の提示でできなかった資料で、石器観察台帳に登録された出土遺構番号及び整理番号を意味している。

5. アスファルト状付着物は、極微量で、肉眼よりも顕微鏡レベルで明瞭に確認できる。したがって図中のスクリーン表現は、分布範囲であって、その量を示したものではない。(町田)

引用文献

小林行雄1959「図解考古学事典」東京創元社

江坂輝弥1962「アメリカ式石鐮」『日本考古学事典』東京堂出版

古川知明・石原正敏1986「付編3 アメリカ式石鐮に関する一考察」『六地山遺跡』新潟市教育委員会

榎原長則1992「Ⅲ2弥生時代の遺構と遺物」『間山-間山遺跡緊急発掘調査報告書Ⅱ』中野市教育委員会

久保勝正・邦江1993「第4節 松原遺跡出土の石器・石製品の内容」『松原遺跡Ⅲ』長野市教育委員会

坂本和也1995「アメリカ式石鐮考」『みちのく発掘 一菅原文也先生還暦記念論集一』

菅原文也先生還暦記念論集刊行会

町田勝則1999「V③A石器群の個別検討」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12

一長野市内その10一 榎田遺跡 第2分冊』長野県埋蔵文化財センターほか

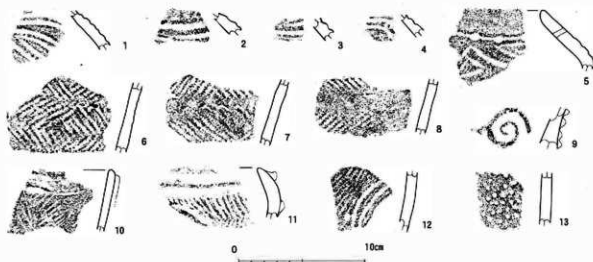
町田勝則2000「3(2)器種別観察と分析」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5

一長野市内その3一 松原遺跡 弥生・総論5』長野県埋蔵文化財センターほか

6 その他の遺物

1 縄文土器 (第112図)

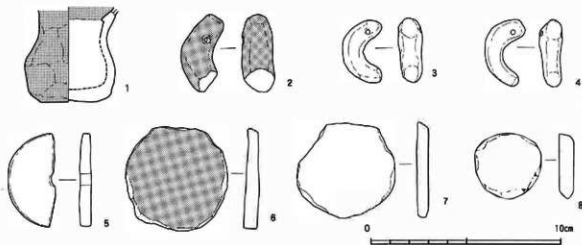
いずれも遺構外より出土したものであるが、主として旧流路よりの出土であり、流込の可能性を考えると、本遺跡北西に縄文期の遺跡が存在することも想定される。1～5は前期諸磯式の浅鉢破片、6～8は横走する羽状縄文が認められ同じく前期に位置づけられる。9～13は中期の土器であろうか



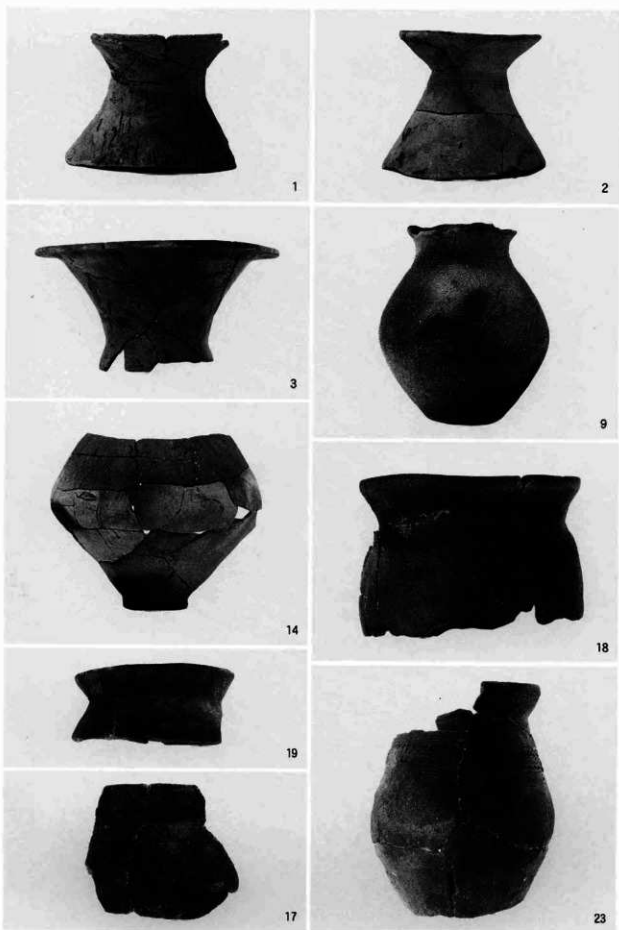
第112図 遺構外出土縄文土器拓影(1:3)

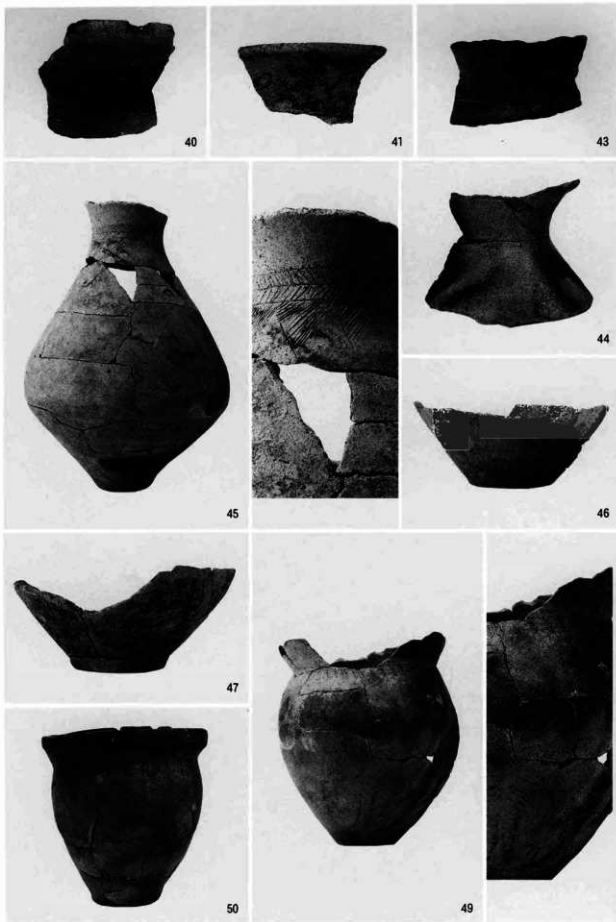
2 土製品類 (第113図)

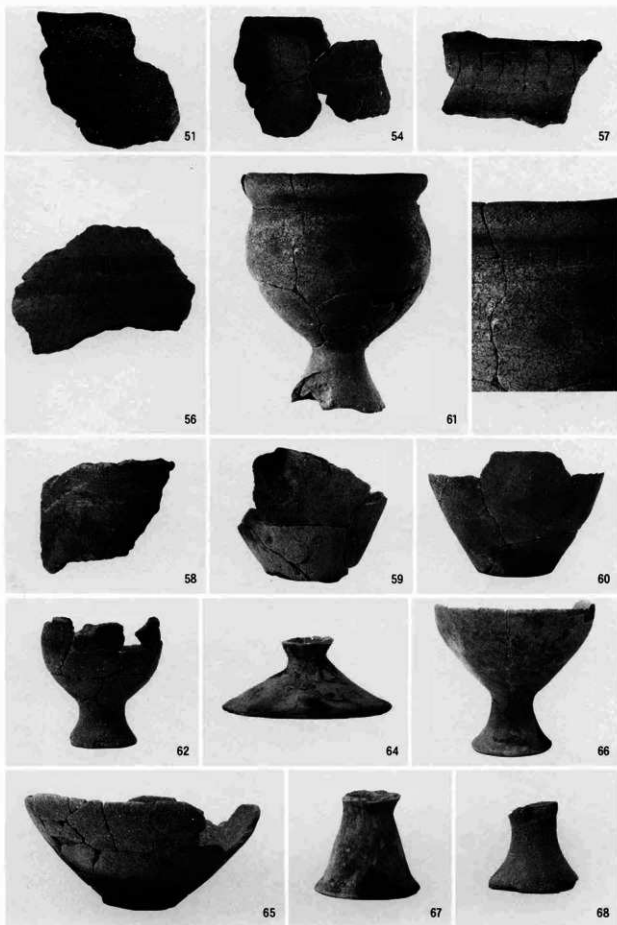
1は22号住居址から出土した小型の壺形土器で手捏ねによって成形されている。内部には赤色顔料(ベンガラ)が頸部付近にまで残存している。外面と口縁部内面は赤彩されている。2は20号住居址より出土した土製勾玉で下半を欠損し2/3程が残存する。全面に軽い磨磨とともに赤彩がなされている。3は17号住居址床面より出土した土製勾玉。完形品で全体にナデで仕上げられる。赤彩は認められない。4は検出面より出土した土製勾玉で3同様ナデで仕上げられ、赤彩は認められない。5は土製紡錘車で、土器破片を転用したもので中央に1孔を有し、周囲は非常に丁寧に擦り磨いて整形している。6～8は土製円盤。いずれも土器破片の周囲を打ち欠いたもので周囲の擦り磨きほとんど認められない。



第113図 土製品類実測図(1:2)









70



71



72



75



76



79



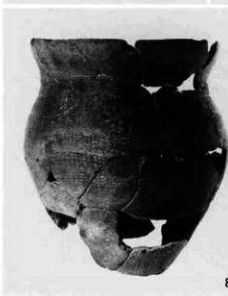
77



89



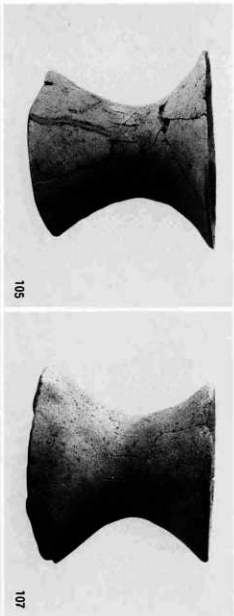
99

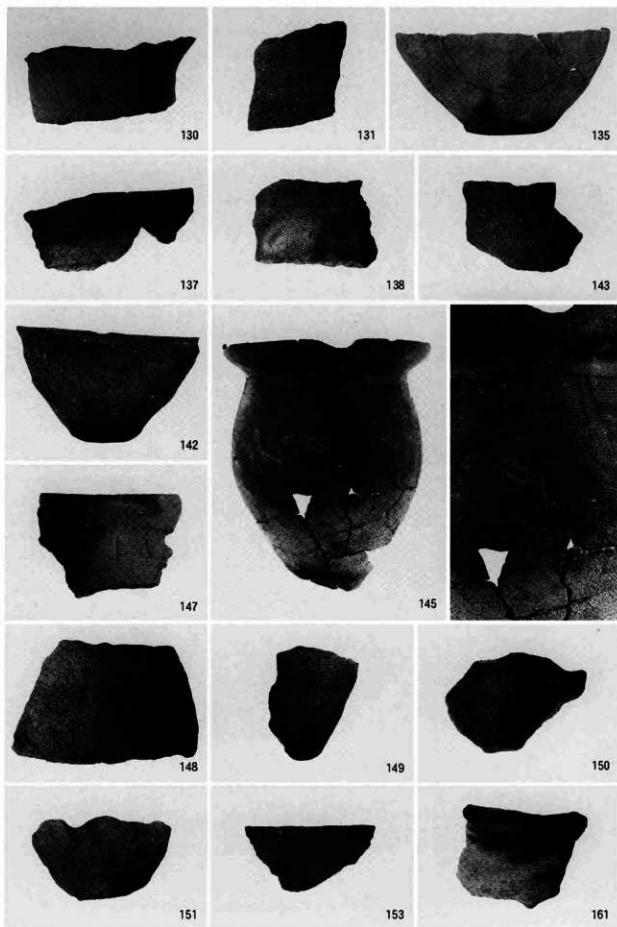


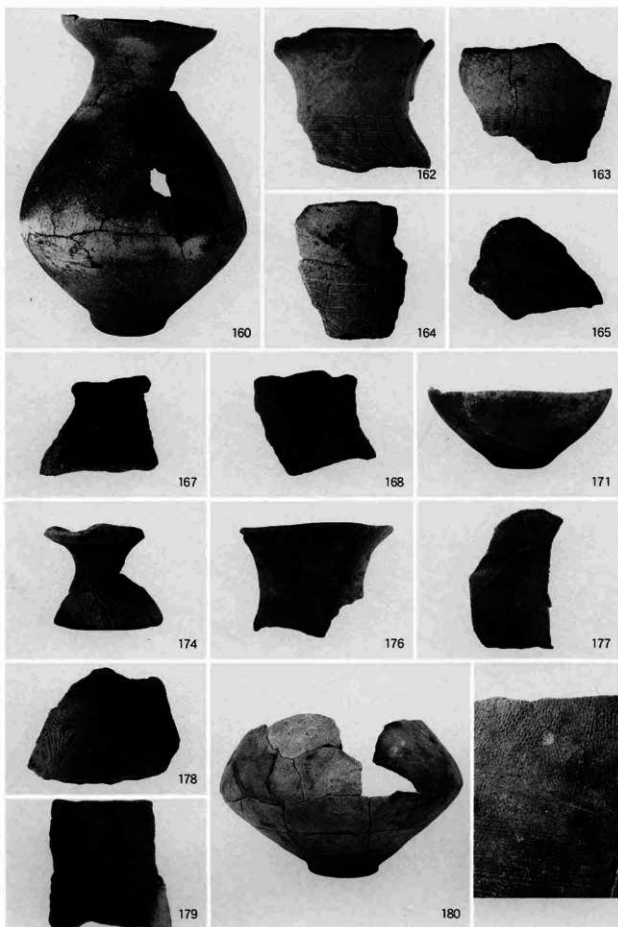
84

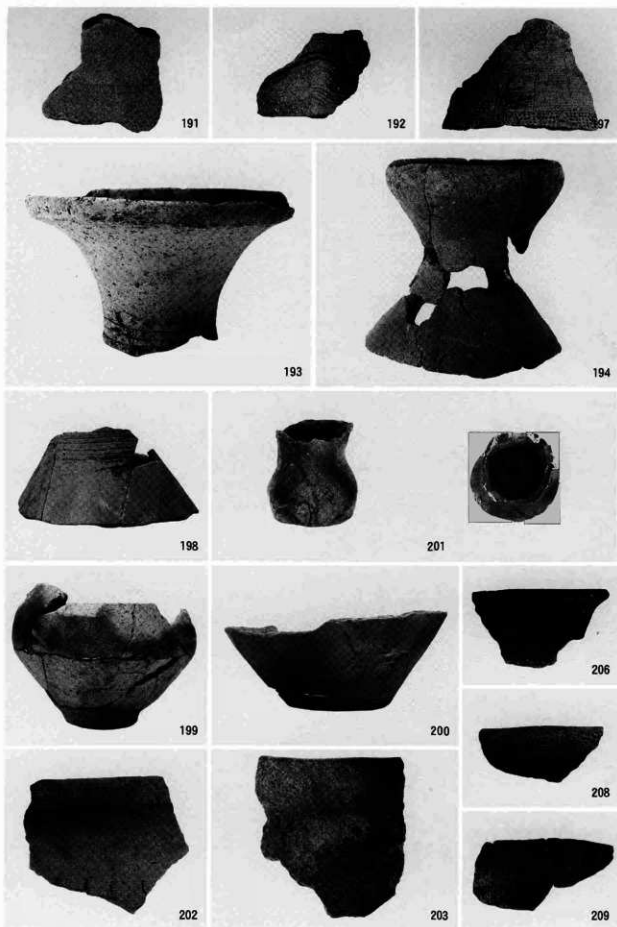


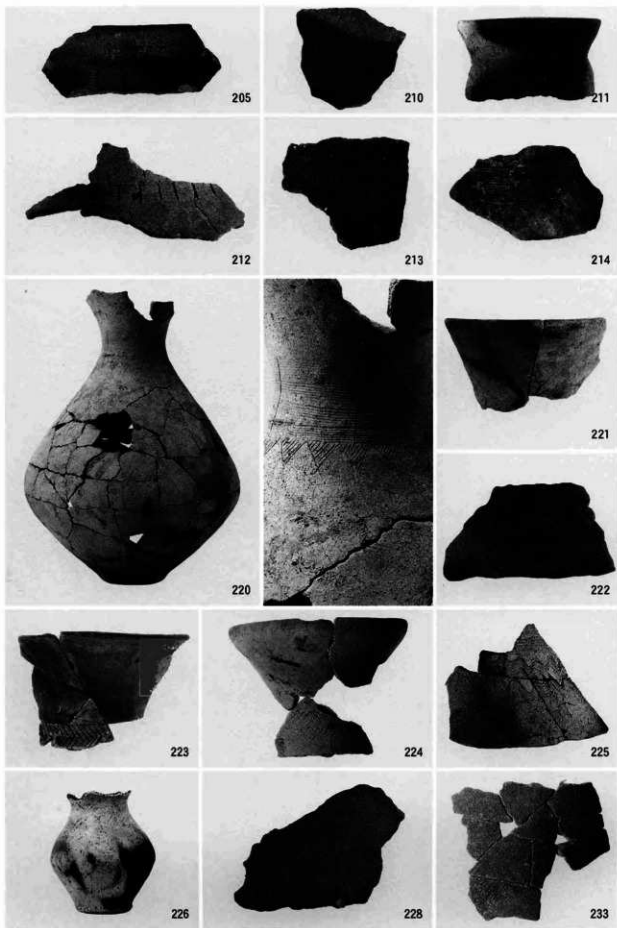
100

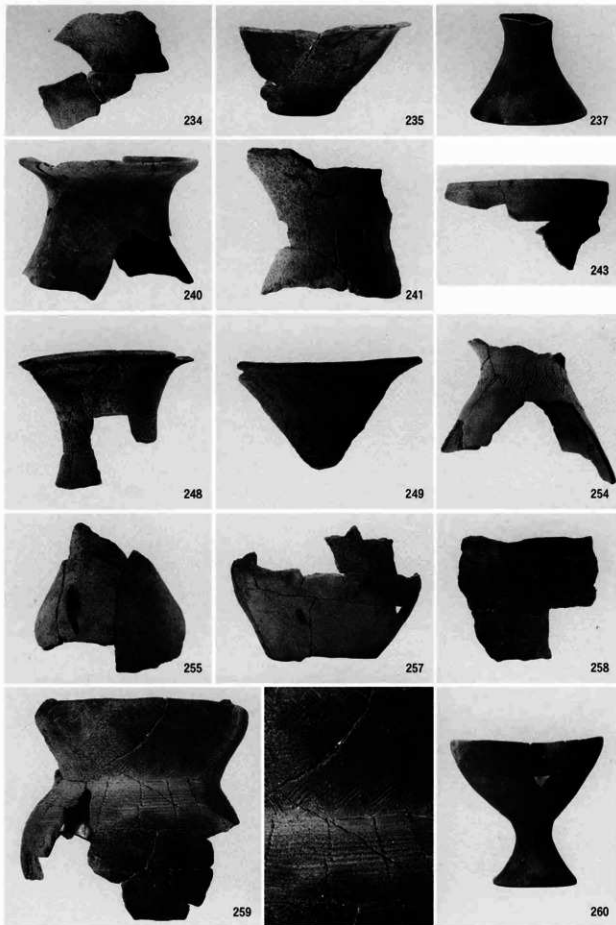


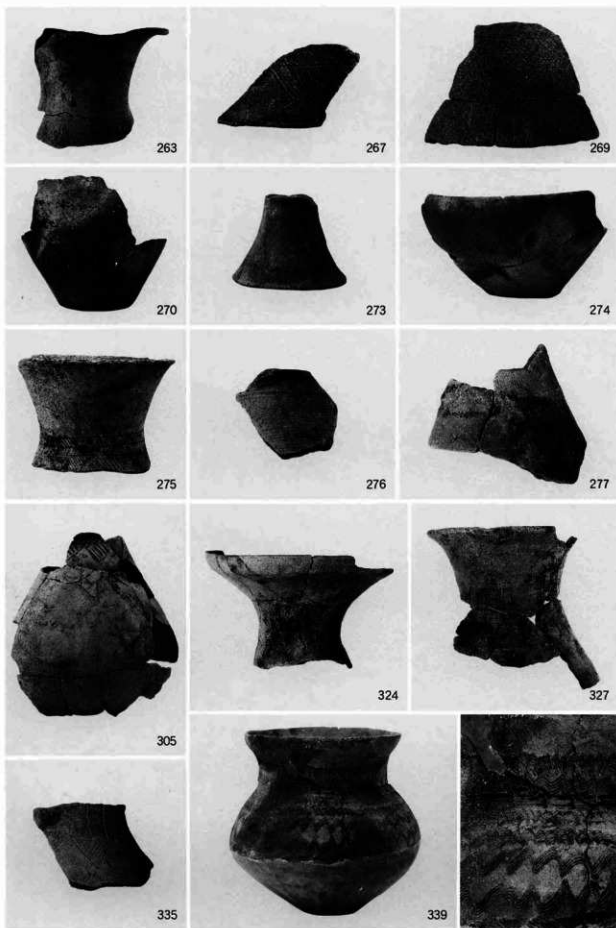


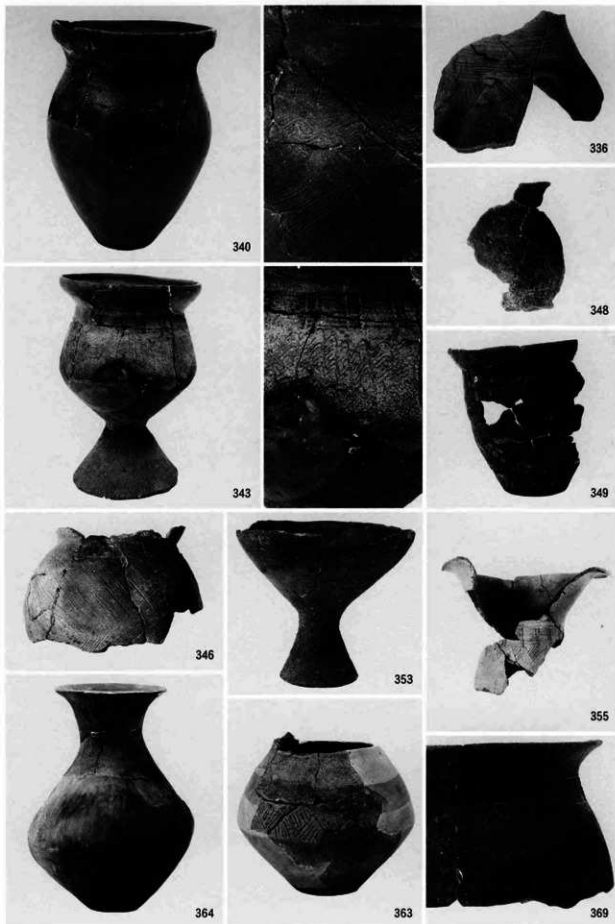


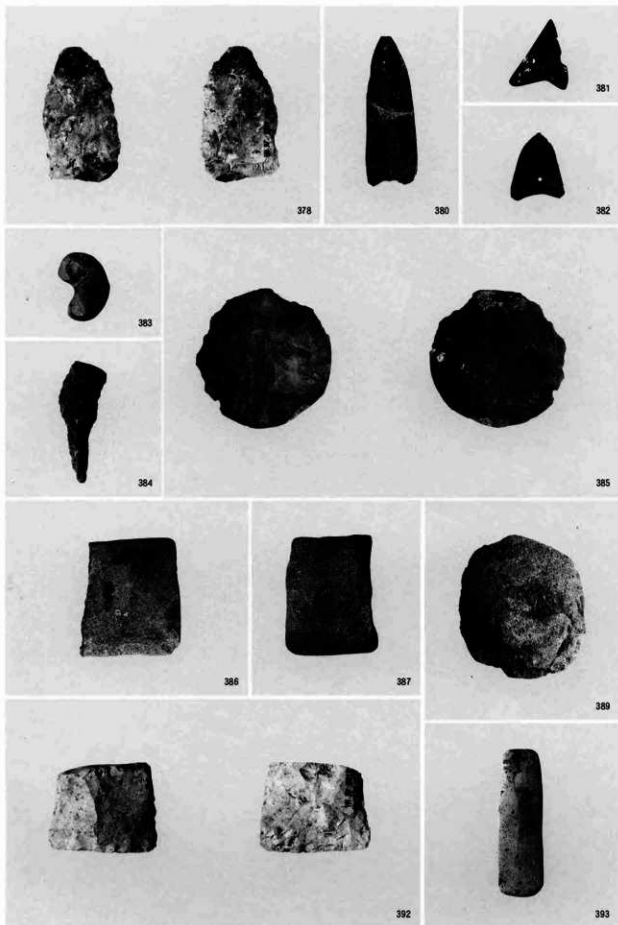


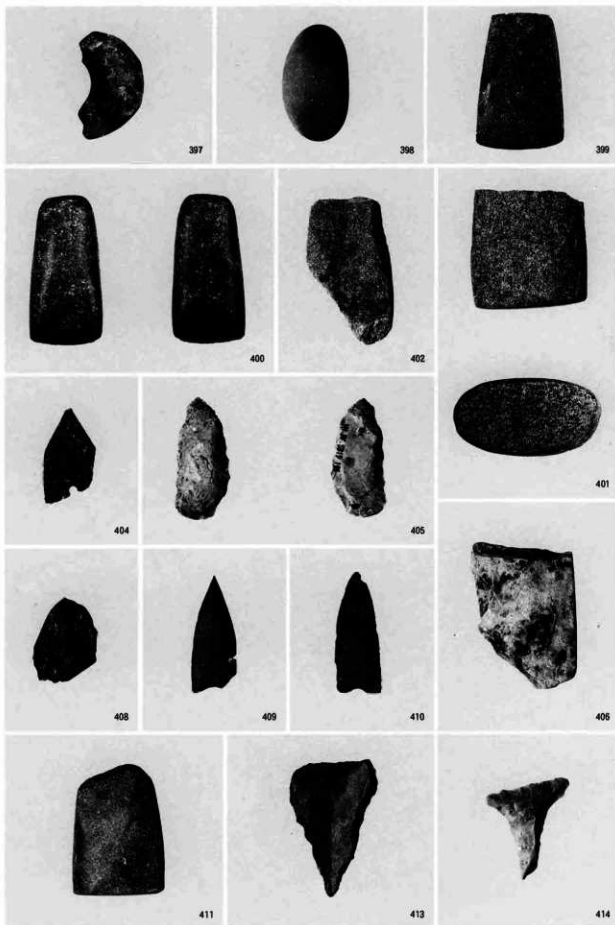


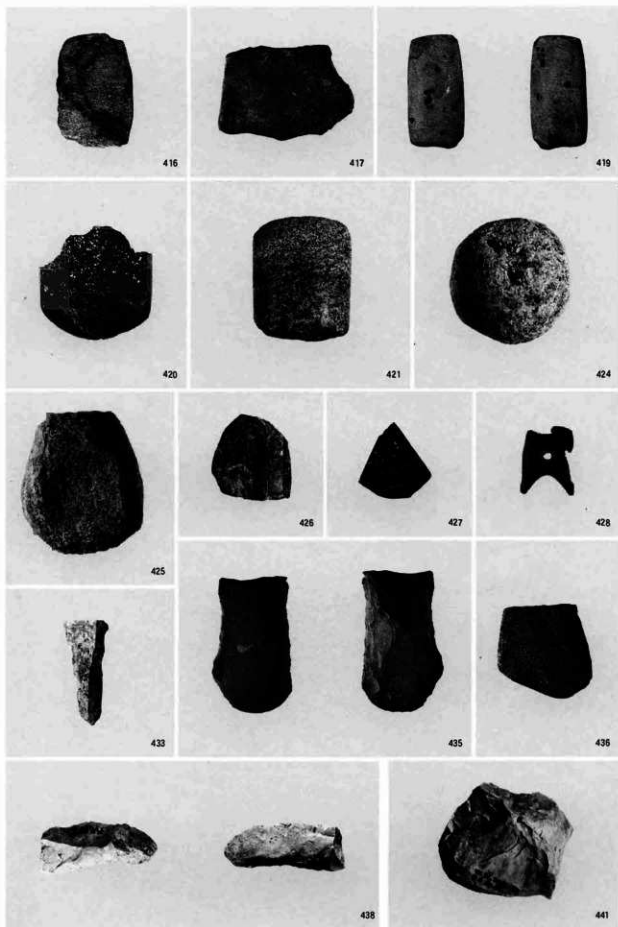


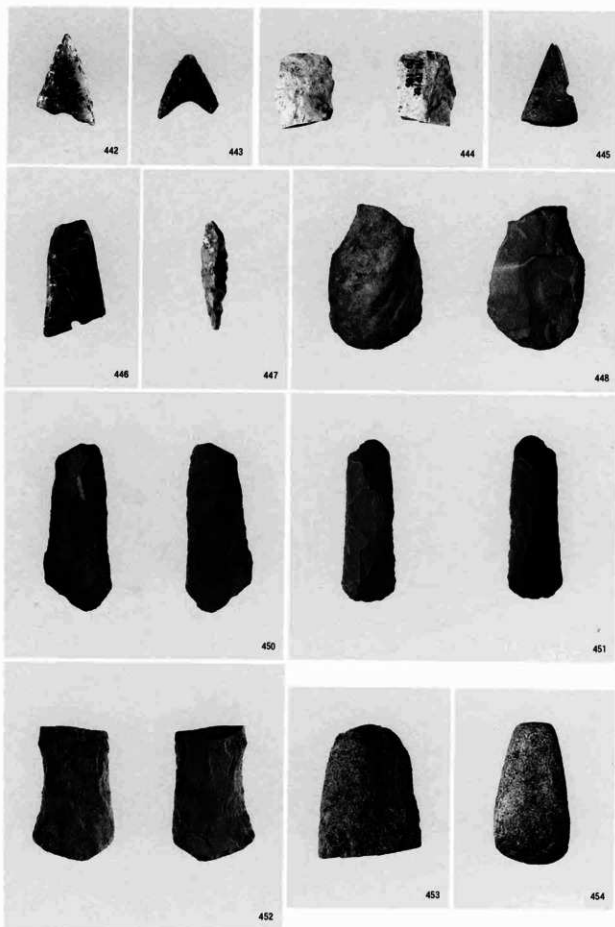






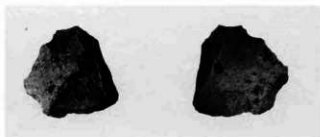




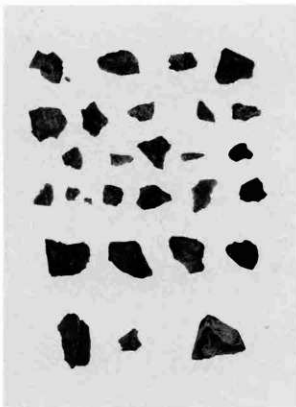




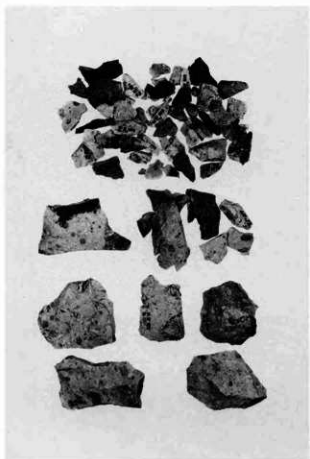
13号住出土流紋岩原石



流紋岩石核



13号住工作ピット出土流紋岩剥片類



13号住出土流紋岩剥片類



19号住出土流紋岩剥片・チップ類

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながのよしだこうこうぐらんどいせき							
書名	長野吉田高校グラウンド遺跡 II							
副書名	長野県長野吉田高等学校サッカーグラウンド造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第97集							
編著者名	千野 浩 町田勝則							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	☎381-2212 長野県長野市小島田町1414番地長野市立博物館内 ☎026-284-0004							
発行年月日	平成13年3月25日							
印刷製本	奥山印刷工業株式会社 長野市大字大豆島字本郷前5959番地1 ☎026-221-3243							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長野吉田高校 グラウンド遺跡	長野県長野市吉田 2丁目367番2	202 01		36° 46° 50°	138° 12° 55°	平成11年 8月4日～ 12月8日	約2,500㎡	グラウンド 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長野吉田高校 グラウンド遺跡	集落址	弥生	竪穴住居址 井戸	土器・石器・勾玉未 製品 土製勾玉		天王山式土器 アメリカ式石織 など東北系遺物が出 土		

長野市の埋蔵文化財第97集

長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ

平成13年3月20日印刷

平成13年3月25日発行

編集 長野市埋蔵文化財センター

発行 長野市教育委員会

印刷 奥山印刷工業株式会社